

明治期の雑誌に載ったイソップ寓話

吉見 孝夫

一 明治期におけるイソップ理解

今日イソップの名は日本では誰でも知っているように、イソップ寓話の一つや二つは記憶しているはずだ。国民的常識といってよい。明治の末年にはこのようにイソップの名、その寓話は常識化したと筆者は見ている。

明治初期のイソップ理解は正確とはいえない。幕末明治初期の新聞にはイソップ寓話が掲載され、明治六年には渡部温訳の『通俗伊蘇普物語』が出版され、よく読まれたといわれるが、イソップ理解がすぐさま深まったわけではない。例えば明治七年五月二四日の「東京日日新聞」^{注一}に載った秋津学人の「世界人物品評」を見てみよう。これは歴史上の人物を「皇国」「漢土」「各国」で対比させるという試みである。例を挙げると、「皇国」の「源頼朝」に対し、「漢土」の「曹操」、「各国」の「亜勒散得大王 希臘」を配し、同じく「平政子」に対し、「則天武氏」「英王以利撒伯」^{イリサベス}を置くといった具合である。その中で、「曲亭馬琴」に対し、「金聖嘆」「伊蘇普 希臘」^{イソップ}が対置されている。金聖嘆は実作者ではないが、『水滸伝』の出版で知られた人物である。馬琴の伝奇的な長編との共通性から選ばれたものであろう。しかし馬琴とイ

ソップを結ぶのは相当に無理がある。『南総里見八犬伝』と動物寓話に類似性を見出したのかもしれないが、当時のイソップ理解が甚だ覺束ないものであることを示す資料といえる。

一四年後の明治二十一年九月発行の雑誌『以良都女』第一五号の「小供と物語本」^{こどもものがたりほん}という記事に次の記述がある。

イソップの作話、グリムスの話、エツデウオルスの話などは皆西洋の花咲爺、かちかち山のはなしです。^{はなし}^{注二}

この時までには渡部訳本に加え、明治二十一年三月には田中達三郎訳の『寓意勸懲伊蘇普物語』も出ており、イソップが子ども向けの童話として広く読まれつつあった時期であり、それにつれイソップは童話作家と認識されていく。

そして四年後の明治二十五年三月には佐藤治郎吉の『少年書類新伊蘇普物語』が出る。これは佐藤の創作動物訓話集であり、イソップとは無関係である。それにもかかわらず「伊蘇普」とあるのは、動物寓話といえはイソップが想起されるほどに、イソップの名が浸透していたこ

とを示している。

この傾向は明治末年になると一層顕著である。明治三六年一〇月刊の大江小波（巖谷小波）『新伊蘇普物語』、明治四五年三月刊の高木敏雄『新イソップ物語』も新作の動物寓話集であり、イソップの翻訳でも改作でもない。ここでは「イソップ」が動物寓話の代名詞になりおおせている。

『昭和天皇実録』のエピソードを持ち出してもよいかもしれない。明治四五年三月一六日の記述を引用しておこう。

この頃、物語創作を御発案になり、この日「裕仁新イソップ」と命名されて、（後略）^{注三}

もう一つ、大正二年（一九一三）一月一八日の一節も付け加えられる。

皇太子は「白熊と獅子」の題にてお話しになる。頃日、しばしば物語を創作され、将来「新イソップ」様のお伽噺を作成されたき旨を側近に語られる。^{注四}ここに挙げた例がいずれも「新伊蘇普／新イソップ」とあるのにも注目される。オリジナルの「（旧）イソップ」に対して、新作の動物寓話をこう呼ぶ習わしができていたかのようである。

もつと直接的な証言がある。巖谷小波『イソップお伽噺』の、明治四四年八月の日付のある巖谷自身の「緒言」にはこうある。

さる程に、明治も已に四十四年の今日、今更イソップでもあるまいとは思ふが、古人の語にも温故知新

と云ふ事がある。^{注五}

イソップは「今更」と称されるほどに知られた存在となったのである。恐らく二〇世紀に入る頃には、イソップは動物寓話の作者だという認識が一般的になっていたと想像されるのである。

イソップの名だけではなく、その寓話の中にも人口に膾炙するものも生まれてくる。「亀と兎」（亀と兎が競走して、亀が勝つ話）は、明治初期から多くの修身教科書に載るし、国定になってからも明治四三年の第二期で採用されている。「もしもしかめよ、かめさんよ」で始まる、石原和三郎作詞、納所弁次郎作曲の唱歌「うさぎとかめ」が発表されたのは明治三四年である。

夏目漱石が『それから』に「牛と競争をする蛙と同じ事で、もう君、腹が裂けるよ。」と書いたのは明治四二年である。「自分を膨らませるヒキガエル」（カエルが牛のまねをして自分の腹を膨らませる話）を多くの読者が知っていると漱石は予想している。

「繰り返し同じ嘘をつく者」の意味で「狼少年」という語がいつ頃から使われ出したのかはわからないが、この語の成立には、「羊飼いの悪戯」（「狼が来たぞ」と嘘をつく羊飼いの話）が国民的常識となまっていることが前提としてある。

二 イソップ普及のルート

さてこのように普及するに至るルートは三つあったと考えられる。

一つはイソップ寓話集の刊行である。明治期には六年の『通俗伊蘇普物語』以降、四四年の巖谷小波『イソップお伽噺』まで二〇種に余る、翻訳、改作とりまぜたイソップ寓話集が出版されている。特に明治四〇年代だけで一〇以上に上る。また、童話集の中にはイソップ寓話を多く含むものがある。その他に中学生向けの英文イソップ集もいくつか出版されている。これらの寓話集の調査結果は別に小稿を用意している。

他の一つは教科書である。修身、国語（読み方）、英語のリーダーにはいくつかのイソップ寓話が載っている。とりわけ国定教科書に採用された場合は、特定の世代なら全員が学んだことになる。教科書におけるイソップについても別に発表する予定である。

もう一つは、新聞、雑誌に掲載されたイソップ寓話がある。幕末や明治期の新聞に載った例は、既に小論を発表している^{注六}。今この小論で話題にするのは、この第三のルートのうち、雑誌に掲載された事例である。

筆者が調べた範囲で判明した、イソップ寓話を掲載する雑誌を時系列で示すと以下のようになる。

一八八五年（明治一八）

『RÔMAJI ZASSHI』第一〇七号

一八八六年（明治一九）

『RÔMAJI ZASSHI』第八・一〇・一二・一六・一九号

一八八七年（明治二〇）

『RÔMAJI ZASSHI』第二一・二二・二五号

一八八八年（明治二一）

『DOSHISHA 文学会雑誌』第一三三号

『女学雑誌』第一三六号

一八八九年（明治二二）

『女学雑誌』第一四四・一五九号

一八九〇年（明治二三）

『女学雑誌』第二四三号

一八九一年（明治二四）

『女学雑誌』第二四七・二五五号

『幼年雑誌』第一卷第三・六・一四号

一八九三年（明治二六）

民友社系『家庭雑誌』第一六〇二〇号

一九〇一年（明治三四）

『婦人と子ども』第一卷第七号

一九〇三年（明治三六）

『万年艸』第四・五号

『婦人と子ども』第三卷第二・一二号

『福音新報』第四〇五号

由分社系『家庭雑誌』第一・二二号

一九〇四年（明治三七）

『婦人と子ども』第四卷第一・二・四・八・一〇・

一一号

『帝国文学』第一〇号

『をんな』第四卷第一一号

一九〇五年（明治三八）

『婦人と子ども』第五卷第五・六・一一号

『新古文林』第一卷第一・三・五号

『をんな』第五卷第八号

一九〇六年（明治三九）

『婦人と子ども』第六卷第二・九号

一九〇八年（明治四一）

『婦人と子ども』第八卷第六号

もとより、数多ある雑誌を悉皆調査したわけではない。たまたま筆者が知り得た事例を挙げたに過ぎない。これ以外にも掲載例は数多くあるだろう。ただ不完全ではあるが、次節にみるようにこれだけでも相当数に上り、この段階でひとまずまとめるのも、雑誌を介してのイソップの普及の様相を見るのに資するところあると考える。

三 雑誌の概要と掲載話

前節に示した明治期にイソップ寓話を載せた雑誌の概要を記す。『ROMAJI ZASSHI』については、既に小論^{注七}を發表しているので省略する。

寓話の中には、改作、翻案の程度が甚だしく、一読してはイソップと無縁に見えるものもあるが、イソップに基づく判断される例はここに採った。また、クルイロフ等からの翻訳であっても、イソップに基づく寓話は小論の対象とした。イソップ寓話の範囲は、Ben Edwin Perryの *Aesopica* に含まれるものの他は、明治前期までに日本に入っていた以下の文献に所収の寓話、イソップ伝に

限った。

『エソポのハブラス』(ESOPO NO FABYLAS)

仮名草子『伊曾保物語』

Robert Thom『意拾喻言』

Thomas James: *Aesop's Fables*

George Fyler Townsend: *Three Hundred Aesop's Fables*

なお、括弧内に「A 150」等としたのは *Aesopica* の番号である。

『DOSHISHA 文学会雑誌』

同志社英学校の学内団体、同志社文学会の機関誌。『同志社文学雑誌』の名で明治二〇年（一八八七）三月に創刊される。その第一三号に「エソップ物語抄訳」と題して以下の二話を載せる。

第一三号（明治二二年五月）

東州散史「○エソップ物語抄訳」

1 「獅子と甘口鼠」(A 150)

2 「兎ト亀」(A 226)

訳者「東州散史」がいかなる人物かは不明である。同志社の教員か生徒であろう。英書からの翻訳と思われるが、原書が何であるかは調査していない。訳文は文語体で、末尾に「散史曰く」と始まる教訓を付け加える。

『女学雑誌』

近藤賢三によって明治一八年（一八八五）七月に女学雑誌社から創刊された、キリスト教に基づく週刊の啓蒙婦人雑誌。翌年の近藤の死によって巖本善治が引き継ぐ。第一三六号から第二五五号までの間に次の七話がイソップ

プから採られている。

第一三六号（明治二十一年一月一七日）

1・2 「小供談 心悪しければ身を損す」（A 133・562 a）

第一四四号（明治二十二年一月一二日）

3 「小供談 ○金の卵を産む鷺鳥」（A 87）

第一五九号（明治二十二年四月二七日）

4 「小供談 不親切なる馬の話 宮規子訳」（A 181）

第二四三号（明治二十三年一二月一三日）

5 「児籃 ふみ子 羊と羊飼のはなし」（A 212）

第二四七号（明治二十四年一月一〇日）

6 「児籃 熊の入婚のはなし ふみ子」（A 140？）

第二五五号（明治二十四年三月七日）

7 「児籃 草と鹿の話 ふみ子」（A 77）

この雑誌は、記事により、総ルビとルビ無しとに分かれるが、「小供談」「児籃」はすべて総ルビである。子ども自身が読むことも想定しているのであろう。

「小供談」欄にある1〜4はデス・マスを使った敬体の口語文。4に「宮規子訳」とある以外は訳者の名を記していないが、おそらく同一人の筆になるのであろう。

「児籃」欄の5〜7もデス・マスを使った敬体の口語文であるが、「なんと皆さん」など呼びかけの言葉を使って、子どもに話しかける口調に工夫している。訳者（作者）の「ふみ子」に関しては調査していない。

『幼年雑誌』

明治期を代表する出版社、博文館から明治二十四年（一

八九一）一月に創刊された、尋常小学校生を読者対象とした雑誌。月二回発行。多くの記事は総ルビで表記されている。この雑誌にイソップ寓話から次の三話が掲載されている。

第一卷第三号（明治二十四年二月三日）

1 「鶴の復讐 文廼家主人訳」（A 426）挿絵あり。

第一卷第六号（明治二十四年三月一七日）

2 「太郎兵衛 蜃気楼主人」（A 721）挿絵あり。

第一卷第一四号（明治二十四年七月一七日）

3 「狼と羊 愛柳子」（A 97）挿絵あり。

1 は敬体の口語文。冒頭に「之はイソップフェーブルと云ふ西洋の書物の中にある譬です」と、イソップ寓話の訳であることを明記する。

2 は舞台を江戸時代の江戸近郊に移した翻案。地の文は、一応「けり」を使用した文語体になっているが、口語体が混在している。会話部分は会話口調を模している。

3 は会話部分を含め全て文語体で通している。

それぞれの訳者（作者）については詳らかにすることはできないが、文体の相違から見て、筆名が異なるとおり、それぞれ別人であろう。

民友社系『家庭雑誌』

明治期には「家庭雑誌」と称する雑誌は少なくとも二種ある。その二種双方にイソップ寓話が掲載されている。そのうちの一つは、徳富蘇峰を社主とする家庭雑誌社から明治二五年（一八九二）九月に創刊された婦人向け啓蒙雑誌である。蘇峰は他に民友社、国民新聞社の社主で

もあり、この三社は所在地が同じで、事実上同一であったという。

月刊であつたが、第一三号からは月二回発行となる。

後には月刊に復するが、小論が取り上げる第一六号、第二〇号は月二回刊行の時期である。この雑誌は一部記事を除いては、ほぼ総ルビに近い表記を採る。以下のイソップ寓話に由来する話を載せる。この中には「クルイロウフ」則ちクルイロフ、「ヅミーツリエフ」則ちドミートリエフの作になる寓話も含まれているが、その中にはイソップ寓話に題材を採ったものがあり、それらはこの小論の対象とする。

第一六号（明治二六年一〇月二五日）

「偶話」

1 「狼と小羊」(A 155)

2 「一人の王を欲しがる蛙群」(A 44)

第一七号（明治二六年十一月一〇日）

「クルイロウフの寓意詩 笛仙子訳」

3 「鴉と而して狐」(A 124) 挿絵あり。

4 「蛙と而して牛」(A 376) 挿絵あり。

第一八号（明治二六年十一月二五日）

「寓意詩 クルイロウフ氏作 笛仙子訳」

5 「獣狩の獅子」(A 339) 挿絵あり。

第一九号（明治二六年十二月一〇日）

「寓意詩 クルイロウフ氏作 笛仙子訳」

6 「鈴虫及蟻」(A 112・373)

7 「狼及び小羊」(A 155)

「寓言」

8 「横柄なる鵲と孔雀」(A 472)

9 「河を渡る犬」(A 133)

10 「稚き牝牛、牝山羊、忍耐強き牝羊及び獅子」(A 339)

11 「狐と張子の頭」(A 27)

12 「狼と鴻の鳥」(A 156)

13 「野兎と雀」(A 473)

14 「狼と狐、狼の裁判を受く」(A 474)

第二〇号（明治二六年十二月二五日）

「寓意詩 ヅミーツリエフ氏作 嵯峨の家主」

15 「鶏と猫と而して鼠」(A 716)

1 は地の文には文語体を用い、会話部分は口語体とする。2 は全文を文語体で通す。クルイロフ作、笛仙子訳の3・7 は口語体。ただし、5 だけは他と異なり、デスマスを用いない。ロシアの詩人、イヴァン・アンドレーヴィッチ・クルイロフ（一七六八／六九—一八四四）は、一部イソップやラ・フォンテーヌの寓話に材を採って、寓話詩を作っている。筆者はロシア語を解しないが、内海周平訳の『完訳クルイロフ寓話集』^{注八}に基づいて見ると、「笛仙子」の訳文は、特段の改変のない翻訳といえそうである。民友社には、ロシア語に通じている嵯峨の家おむろ、小西増太郎が出入りし、二葉亭四迷がツルゲーネフの『あひどき』を同社から出版している。笛仙子はこの三人のうちの誰かであろうか。もともと文体は、嵯峨の家訳の15とは大分異なる。日本におけるクル

イロフ翻訳には昭和二年（一九二七）の『世界童話大系』の第六巻にある中村白葉訳が知られるが、それを三十年ほど遡る翻訳である。あるいは英語訳等からの重訳か。なお、3・5には挿絵が付いている。

「寓言」と題された8・14は訳者も原書も不明だが、原書を探る手がかりになる事実がある。これらはパエドルス寓話集の順とよく対応している。8・9・10がパエドルス寓話集の第一巻の三、四、五番であり、11・12・13・14が、同じく七、八、九、一〇番である。つまり、パエドルス第一巻の三番から一〇番を、六番を除いて順もそのままに掲載しているのである。『イソップ風寓話集』^{注九}所収の岩谷智訳のパエドルス寓話に照らし合わせると、改変のないほぼ忠実な訳文といつてよい。パエドルスの日本語訳は、大正一四年（一九二五）の『世界童話大系』第一巻の山崎光子訳が最初と思われるがそれに先行するものとなる。おそらくは欧米語訳本からの重訳であろう。地の文は文語体、会話には口語体を用いる。

「ツミーツリエフ」、則ちイヴァン・イヴァノヴィッチ・ドミートリエフ（一七六〇〜一八三七）はプーシキンにも影響を与えた詩人で、クルイロフに先行して寓意詩を発表している。訳者「嵯峨の家主」則ち嵯峨の家おむろは、民友社系の雑誌でしばしばロシア文学を紹介している。寓話の前に訳者によるドミートリエフの紹介文を、末尾に評語を付す。これらは文語体だが、寓話自体の訳文は敬体の口語文。これも日本におけるドミートリエフ翻訳の最初期と位置付けられよう。

『婦人と子ども』

女子高等師範学校附属幼稚園の関係者が中心となった幼児教育の団体フレーベル会が明治三四年一月に創刊した、幼児教育、婦人教育のための月刊誌。当時の女高師は東京の各校のみである。基本的に家庭教育を担う婦人を読者対象とするが、一部子ども向けの記事があり、その中にイソップ寓話の翻訳・翻案・改作が見られる。

第三巻第一号（明治三十六年一月）に「予告／次号からは、毎号、イソップ物語を訳載することに致します」と事前通告したとおり、中断はあるがほぼ三年ほど訳載は続く。

第一巻第七号（明治三四年七月）

1 かめとうさぎのかけっこ（A 226）挿絵あり。

第三巻第二号（明治三十六年二月）

「●伊蘇普物語 牧羊訳」

2 「其一、獅子と二十日鼠」（A 150）

3 「其二、狼と仔羊」（A 155）

4 「其三、驢と鈴虫」（A 184）

5 「お日様と風 やよひ生」（A 46）

第三巻第三号（明治三十六年三月）

「◎伊蘇普物語 牧羊訳」

6 「其四、狼と鶴」（A 156）

7 「其五、父と子ども」（A 53）

8 「其六、蝙蝠と鼯鼠」（A 172）

9 「其七、鶏と宝石」（A 503）

10 「其八、燕と鳥」（A 229）

- 11 「其九 獅子王」(A 334)
12 「其十 主人と犬と」(A 330)

第三卷第四号(明治三六年四月)

「伊蘇普物語 牧羊詠」

- 13 「其十一 蟻と鈴虫」(A 112・373)
14 「其十二 兎と亀」(A 226)
15 「其十三 炭焼と布瀑し人」(A 29)
16 「其十四 漁夫の音楽」(A 11)

第三卷第五号(明治三六年五月)

「伊蘇普物語 牧羊詠」

- 17 「其十五 蝗取り」(A 199)
18 「其十六 犬と影」(A 133)
19 「其十七 仁王と牛追」(A 291)
20 「其十八 むぐらの母子」(A 214)
21 「其十九 牧畜者と仔牛」(A 49)

第三卷第六号(明治三六年六月)

「伊蘇普物語 牧羊詠」

- 22 「其二十 仔鹿と母親」(A 351)
23 「其二十一 驢馬と狐と獅子と」(A 191)
24 「其二十二 蠅と蜜壺」(A 80)
25 「其二十三 牝獅子」(A 257)

第三卷第七号(明治三六年七月)

「伊蘇普物語 牧羊詠」

- 26 「其二十四 農夫と蛇」(A 617)
27 「其二十五 人間と獅子と」(A 284)
28 「其二十六 柘榴と林檎と荊棘」(A 213)

- 29 「アンドロクルスと獅子 牧羊」(A 563 a)
第三卷第八号(明治三六年八月)

「いそつぷ物語」

- 30 「其二十七 農夫と鶴」(A 194)
31 「其二十八 山から鼠」(A 520)
32 「其二十九 熊と狐」(A 288)
33 「其三十 亀と鷺」(A 230)

第三卷第九号(明治三六年九月)

「いそつぷ物語」

- 34 「其卅一 狐と山羊」(A 9)
35 「其卅二 烏と白鳥」(A 398)
36 「其卅三 渴した鳩」(A 201)

第三卷第一〇号(明治三六年一〇月)

「いそつぷ物語」

- 37 「其三十四 犬と牡牛」(A 702)
38 「其三十五 牡牛と車の軸」(A 45)
39 「其三十六 (無題)」(A 142)

第三卷第一一号(明治三六年十一月)

「いそつぷ物語 記者」

- 40 「其卅七 熊と二人の友人」(A 65)
41 「其卅八 尾を失した狐」(A 17)
42 「其卅九 獅子の恋」(A 150)

第三卷第一二号(明治三六年十二月)

「いそつぷ物語 記者」

- 43 「其四十 吝嗇者」(A 225)
44 「其四十一 仔家と羊と山羊」(A 85)

- 45 「其四十二 自慢する人」(A 33)
 46 「其四十三 子供と金米糖」(Aesopica がない。『通俗伊蘇普物語』の第一〇三話「童児と榛実の話」、『寓意勸懲伊蘇普物語』の第四七話「童児と榛実の話」)

と榛実の話」)

第四卷第一号(明治三十七年一月)

「いそつぷ物語」

- 47 「其四十四 子供と狼」(A 210)
 48 「其四十五 子供と蛙」(Aesopica がない。『通俗伊蘇普物語』の第一九話「児輩と蛙の話」、『寓意勸懲伊蘇普物語』の第五六話「児輩と蛙の話」)

第四卷第二号(明治三十七年二月)

「いそつぷ物語」

- 49 「其四十六 蛇と人」(A 51)
 50 「其四十七 牡牛と屠牛者」(A 180290)
 51 「其四十八 塩商人と驢馬」(A 305)
 52 「其四十九 病気の鹿」(A 305)

第四卷第四号(明治三十七年四月)

「いそつぷ物語」

- 53 「其五十 毒虫に刺された子供」(Aesopica がない。『通俗伊蘇普物語』の第九〇話「童児と蕨の話」、『寓意勸懲伊蘇普物語』の第六二話「童児と蕨の話」)
 54 「其五十一、天文学者」(A 40)
 55 「其五十二、牛と蛙と」(A 376)

- 56 「其五十三、小山羊と狼」(A 98)
 57 「其五十四、お老婆さんとお医者」(A 57)

第四卷第五号(明治三十七年五月)

「いそつぷ物語」

- 58 「(五十五) 百姓の親子」(A 42)
 59 「(五十六) 鶏と鷺」(A 281)
 60 「(五十七) 狐と猿」(A 81)
 61 「(五十八) 腹と手足等」(A 130)

第四卷第六号(明治三十七年六月)

「いそつぷ物語」

- 62 「(五十九) 親子の蟹」(A 322)
 63 「(六十) 鼠と蛙と鷹と」(A 384)
 64 「(六十一) 馬と獅子」(A 339)

第四卷第七号(明治三十七年七月)

「いそつぷ物語」

- 65 「(六十二) 鼠の会議」(A 613)
 66 「(六十三) 猪と狐」(A 224)
 67 「(六十四) 年老った獵犬」(A 532)
 68 「(六十五) 二人の友と手斧」(A 67)
 69 「(六十六) 樅樹と葦」(A 70)

第四卷第八号(明治三十七年八月)

「いそつぷ物語」

- 70 「(驚と矢)」(A 276)
 71 「(獅子と野猪)」(A 338)
 72 「(馬と影)」(A 460)
 73 「(蟻と鳩)」(A 235)

第四卷第一〇号（明治三七年一〇月）

「いそつぷの話」

74 「狐と豹」(A 12)

75 「獅子と兎」(A 148)

76 「獅子と熊と狐」(A 147)

77 「狐と農夫」(A 283)

78 「盗賊と鶏」(A 122)

第四卷第一一号（明治三七年一一月）

「いそつぷの話」

79 「腹ふくらした狐」(A 24)

80 「獵夫と木樵り」(A 326)

81 「兎と獵犬」(A 331)

82 「金の卵を生む鶏」(A 87)

83 「獅子と狐と驢馬」(A 149)

第五卷第五号（明治三八年五月）

「いそつぷの話 おきな」

84 「人殺し」(A 32)

85 「獅子と鷲」(A 335)

86 「真理と旅人」(A 355)

87 「獅子と狐」(A 394)

第五卷第六号（明治三八年六月）

88 「鳥の智慧」(A 390)

89 「ありとほと」(A 235)

90 「いそつぷの話」(A 426)

第六卷第二号（明治三九年二月）

91 「金の手斧」(A 173)

第六卷第九号（明治三九年九月）

92 「欲ばつた罰 弥彦」(イソップ伝)

第八卷第六号（明治四一年六月）

93 「猪と狐」(A 224)

一雑誌に九三話というのは、筆者の調べた範囲では最も多い。多くは「いそつぷ物語」「いそつぷの話」など「イソップ」の名を冠しているが、それのないのも数話ある。そのうち1「かめとうさぎのかけっこ」は「うさぎさんのねているうちにさきえかけていつて一ばんになりましょう」という一文だけが、挿絵を見ても明らかにイソップ寓話をふまえたものである。91「金の手斧」、92「欲ばつた罰」は舞台を日本に置き換えた翻案である。29「アンドロクルスと獅子」は、人間に助けられたライオンの報恩譚である。Aesopicaでは、この人間の名前を明記しないのを563に、「アンドロクルス」という名を記すのを563aに分類している。明治期までのイソップ寓話集では563型はあるが、563a型は見あたらない。第三巻第七号でも26、28は「伊蘇普物語」としているが、29は別扱いとなっているので、これはイソップ寓話集以外の何かから訳したものと推定される。

Aesopica になく46・48・53は Thomas James Townsend の本にはある。前者の翻訳『通俗伊蘇普物語』の第一四七・一一九・九〇話、後者の翻訳『寓意勸懲伊蘇普物語』の第四七・五六・六二話がこれに当たる。

訳者（作者）名の明記されているのがいくつかある。

2、4、6、29は「牧羊」とある。本誌には「東牧羊」の名での記事があるので、東姓とわかる。おそらく「東基吉」であろう。東基吉は東京女子師範教授で、本誌の中心的執筆者。第二巻第七号・第八号（明治三五年七月・八月）には「子供に聞かせる話につきて」という彼の考える童話論を載せている。『家庭童話 母のみやげ』（同文館、明治三八年十一月）、『教育童話 子供の樂園』（同文館、明治四〇年四月）という童話集の編者でもある。これらにもイソップ寓話が含まれている。5の「やよひ生」は不明。本誌には「小寺弥彦」名の記事があるので、92の作者「弥彦」はこの人物であろう。

明治三七年二月に始まり、翌年九月に終わった日露戦争という時代相が教訓に反映している。64、85の教訓は、それぞれ「力即ち正といふことがあります、何とかいふ国は、今迄よく獅子の様な事をしましたっけ。」「驚といへば、今日本と戦争して居る国の外交も思ひ出されます。獅子の言ふことは賢いじやありませんか。」というものである。70「驚と矢」は、驚が自分の羽で作られた矢に射られる話である。これの教訓は「旅順口で戦死したマカロフ丁督によく似てゐるではありませんか」とある。ロシア海軍提督ステパン・マカロフの著書『海軍戦術論』は諸言語に翻訳された名著だという。それに学んだ日本海軍にしてやられた事実をいう。マカロフの戦死は70が載った四か月前のことである。

『万年艸』

森鷗外が中心となって刊行された、一九〇二年一〇月

創刊の文芸雑誌。この第四・五巻に「寓意譚」と題してそれぞれ八話・七話が載っている。そのうちそれぞれ二話・三話がイソップに基づく。

第四巻（明治三六年二月）

「寓意譚 江村」

1 「孔雀の真似」（A 472）

2 「驢馬」（A 188）

第五巻（明治三六年四月）

「寓意譚 江村」

3 「奴隸と獅子と」（A 563）

4 「狐と鶏と」（A 562 a）

5 「エソオブ」（イソップ伝）

文体は敬体の口語文。作者（訳者）は目次に「荒木江村」とある。荒木については『西洋一口噺』（明治三九年九月、香洋堂）という編著があることしかわからない。

『福音新報』

植村正久が創刊した日本基督教会の週刊機関誌。明治二三年三月に創刊された『福音週報』が翌明治二四年二月に発行を禁じられ、同年三月に『福音新報』が創刊されるが、これも明治二四年六月に発禁となる。同年七月に『福音新報』の名のままで改めて第一号が出される。その第四〇五号に「群鳩」と題して五つの寓話を載せる。そのうちの三話がイソップ寓話である。

第四〇五号（明治三六年四月二日）

「群鳩（ひばり） 冷泉」

1 「（一）北風と太陽」（A 46）

- 2 「(四) 松と無花果」(A 13)
- 3 「(五) 獅子と野鼠」(A 150)

本文は敬体の口語文。訳者「冷泉」は百島冷泉である。百島冷泉は明治四一年に、G.F. Townsend の *Three Hundred Aesop's Fables* を訳した『イソップ物語』を内外出版協会から出している。これには1・2に相当する話はない。3の話はあるが、その本文は全く異なる。

由分社系『家庭雑誌』

明治期のもう一つの「家庭雑誌」が、社会主義者堺利彦が発行・編集した月刊誌である。堺と友人、小林助市が共同経営する由分社から明治三六年四月に創刊される。家庭改良、社会改良を目指して発行したという。創刊当時、堺は『万朝報』の記者であり、日露非戦論を唱えて、内村鑑三、幸徳秋水とともに朝報社を辞したのは、同年十一月のことである。第一、二号にイソップ寓話が計四話掲載されている。

第一号(明治三六年四月)

「イソップ教訓談」

- 1 「(一) 獅子と鼠」(A 150)
- 2 「(二) 狼と小羊」(A 155)

第二号(明治三六年五月)

「イソップ教訓談」

- 3 「(三) 狐と山羊」(A 9)
- 4 「(四) 熊と狐」(A 288)

訳文は常体の口語文。訳者名が明記されていないが、『家庭雑誌 解題・総目次・索引』注10は堺と推定し

ている。

『帝国文学』

東京帝国大学文科大学の学内団体、帝国文学会の機関誌。明治二八年(一八九五)創刊。この第一〇号に、上田万年が「御伽噺三則」と題して、童話を三話載せている。そのうちの二話がイソップ寓話に由来する。

第一〇号(明治三七年一月)

「御伽噺三則 上田万年」

「其三 人の口」(A 721)

これは「ロバと親子」として知られている話である。ロバの設定を荷車を引く小馬にするなどの改変を施している。本文は敬体の口語文。上田は明治四〇年に『新訳伊蘇普物語』を鐘美堂から出版しているが、これには該当話は載っていない。明治三七年当時は、イソップの名は児童にも行き渡っていたと思われる。「ロバと親子」の話も、他のイソップ寓話集にもあり、よく知られていた。それを、敢えて学術的色彩の濃い『帝国文学』に載せた意図はどこにあったのかは不明としなければならぬ。

『をんな』

大日本女学会から出された明治三四年一月創刊の雑誌。同会は、会員、執筆者に華族が名を連ね、良妻賢母型の美育奨励を方針とする。この第四卷第一号、第五卷第八号に「教訓御伽百譚」と題しそれぞれ二話を載せる。それぞれそのうちの二話がイソップ寓話である。

第四卷第一号(明治三七年一月)

「教訓 御伽百譚 巖谷小波聞 高階柳陰訳」

1 「家鶏」(A 55)

第五卷第八号(明治三十八年八月)

「教訓 御伽百譚 巖谷小波聞 高階柳陰訳」

2 「葡萄酒」(A 42)

巖谷小波は『イソップお伽噺』を明治四四年九月に三立社から出版している。これには1・2と同じ話が「六五 小細工の失策(婆さんと婢僕)」「二 勤勉(葡萄酒の宝)」と題して掲載されているが、本文は全く異なる。訳者高階を詳らかにすることはできないが、明治四〇年前後に『文芸倶楽部』にいくつか小説を発表している。訳文は、敬体の口語文。

『新古文林』

矢野竜溪の近事画報社から出された文芸雑誌。明治三八年五月創刊。編集者は国木田独步。「新古」と銘打つように、新作と、西鶴・近松などの主に江戸期の文芸作品とを合わせ載せる。「伊曾保物語」と題して、第一号に八話、第三号に一一話、第五号に九話、計二八話のイソップ寓話を掲載する。

第一号(明治三十八年五月)

「伊曾保物語 ところや山人」

1 「山の作物」(A 520)

2 「片目の鹿」(A 75)

3 「坑 夫と漂布者」(A 29)

4 「風と太陽」(A 46)

5 「太陽の結婚」(A 314)

6 「二つの壺」(A 378)

7 「老人と死の神」(A 60)

8 「二つの袋」(A 266)

第三号(明治三十八年七月)

「伊曾保物語 ところや山人」

9 「喇叭手」(A 370)

10 「雲雀」(A 447)

11 「猫と恋の女神」(A 50)

12 「游泳少年」(A 211)

13 「盗賊と旅宿の主人」(A 419)

14 「兄と妹」(A 499)

15 「仇同士」(A 68)

16 「寡婦と牝鶏」(A 58)

17 「半人半羊神」(A 35)

18 「蟹」(A 322)

19 「犬に噛まれた人」(A 64)

第五号(明治三十八年八月)

「伊曾保物語 ところや山人」

20 「お月様」(A 468)

21 「老婆とお医者様」(A 57)

22 「捕鳥者と天鵝」(A 193)

23 「病める鷺」(A 324)

24 「老婆と下婢」(A 55)

25 「驢馬」(A 182)

26 「海辺の旅人」(A 177)

27 「驢馬の影」(A 460)

明治期雑誌掲載イソップ寓話対照表

- 寓話の配列は B. E. Perry の *Aesopica* (University of Illinois Press, 1952) の番号に従った。
- 各寓話のタイトル名は、1～471 は中務哲郎訳『イソップ寓話集』(岩波書店、1999 年 3 月) に、472～579 は岩谷智・西村賀子訳『イソップ風寓話集』(国文社、1998 年 1 月) に従った。ただし、漢字表記は極力常用漢字の範囲にとどめるため改めた。他は Perry の *Babrius and Phaedrus* (Harvard University Press, 1965) の英文タイトルを和訳した。*Aesopica* にない寓話は『通俗伊蘇普物語』のタイトル名を採った。イソップ伝からの 2 話には仮に番号を付けた。
- 各雑誌には、次のような略記を用いた。
 同：『DOSHISHA 文学会雑誌』 女：『女学雑誌』 幼：『幼年雑誌』
 家 1：民友社系『家庭雑誌』 婦：『婦人と子ども』 万：『万年艸』
 福：『福音新報』 家 2：由分社系『家庭雑誌』 帝：『帝国文学』
 を：『をんな』 新：『新古文林』
- 各雑誌の巻号は、漢数字で巻を、算用数字で号を示した。

Aesopica 番号とタイトル	同	女	幼	家1	婦	万	福	家2	帝	を	新
9 井戸の中のキツネとヤギ					三9			2			9
11 笛を吹く漁師					三4						11
12 キツネとヒヨウ					四10						12
17 しっぽのないキツネ					三11						17
24 腹のふくれたキツネ					四11						24
27 キツネとモルモートの面				19							27
29 灰屋と洗濯屋					三4					1	29
32 人殺し					五5						32
33 ほら吹き					三12						33
35 人間とサテュロス											35
40 天文学者					四4						40
42 農夫と息子たち					四5				五8		42
44 王様を欲しがるカエル				16							44
45 牛と車軸					三10						45
46 北風と太陽					三2	405				1	46
49 子牛を盗まれた牛飼いとライオン					三5						49
50 イタチとアプロディテ										3	50
51 農夫と蛇					四2						51
53 兄弟げんかする農夫の息子					三3						53
55 女主人と召し使い									四11	5	55
57 老薬と医者					四4					5	57
58 女とメンドリ										3	58
60 老人と死に神										1	60
64 犬にかまれた男										3	64
65 旅人とクマ					三11						65
67 旅人とおの					四7						67
68 敵同士										3	68
70 カシとアシ					四7						70
75 片目の鹿										1	75
77 鹿とブドウ		255									77
80 ハエ					三6						80
81 王に選ばれた猿とキツネ					四5						81
85 子豚と羊					三12						85
87 金の卵を生むガチョウ		144			四11						87
88 ヘルメスと彫刻家										5	88
97 子ヤギと笛を吹くオオカミ			一14								97
98 屋根の上の子ヤギとオオカミ					四4						98
112 アリとセンテコガネ				19	三4						112
122 泥棒とオンドリ					四10						122
124 カラスとキツネ				17							124
130 胃袋と足					四5						130
133 肉を運ぶ犬		136		19	三5						133
140 恋するライオン		247			三11						140
142 老いたライオンとキツネ					三10						142
147 ライオンとクマ					四10						147
148 ライオンとウサギ					四10						148
149 ライオンとロバとキツネ					四11						149
150 ライオンとネズミの恩返し	13				三2	405	1				150
155 オオカミと子羊				16・19	三2		1				155
156 オオカミとサギ				19	三3						156
172 コウモリとイタチ					三3						172
173 きこりとヘルメス					六2						173
177 旅人と薪										5	177

Aesopica番号とタイトル	同	女	幼	家1	姉	万	福	家2	帝	を	新	
180塩を運ぶロバ					四2							180
181ロバとラバ		159										180
182神像を運ぶロバ											5	182
184ロバとセミ					三2							184
188ライオンの皮を被ったロバ						四						188
191ロバとキツネとライオン					三6							191
193猟師とヒバリ											5	193
194猟師とコウノトリ					三8							194
199子供とサソリ					三5							199
201のどの濡いたハト					三9							201
210羊飼いのいたずら					四1							210
211水浴びをする子供											3	211
212毛を刈られる羊		243										212
213ザクロとリンゴとイバラ					三7							213
214モグラ					三5							214
224イノシシとキツネ					四7・八6							224
225守銭奴					三12							225
226カメとウサギ	13				一7・三4							226
229ツバメとハシボソガラス					三3							229
230カメとワシ					三8							230
235アリとハト					四8・五6							235
257ライオンとキツネ					三6							257
266振り分け袋											1	266
276射られたワシ					四8							276
281タナグラのオンドリ					四5							281
283火を運ぶキツネ					四10							283
284一緒に旅をする人間とライオン					三7							284
288クマとキツネ					三8			2				288
290牛と肉屋					四2							290
291牛道いとヘラクレス					三5							291
305病気の鹿					四2							305
314太陽とカエル											1	314
322カニと母親					四6						3	322
324病気のガラス											5	324
326臆病な猟師					四11							326
330犬と主人					三3							330
331犬とウサギ					四11							331
334ライオンの治世					三3							334
335ライオンとワシ					五5							335
338ライオンとイノシシ					四8							338
339ライオンと野生のロバ				18・19	四6							339
351子牛と鹿					三6							351
355旅人と真実の女神					五5							355
370ラッパ兵											3	370
373セミとアリ				19	三4							373
376自分を膨らませるヒキガエル				17	四4							376
378二つのつば											1	378
384ネズミとカエル					四6							384
390ハシボソガラスと水差し					五6							390
394ライオンの子分のキツネ					五5							394
398ガラスと白鳥					三9							398
413イチジクとオリーブ							405					413
419泥棒と宿屋の主人											3	419
426キツネとツル			一3		五11							426
447父親を埋葬するヒバリ											3	447
460ロバの陰					四8						5	460
468月と母親											5	468
472高慢ちきなガラスとクジャク				19		四						472
473ウサギに讃歌するスズメ				19								473
474猿に載られるオオカミとキツネ				19								474
499姉と弟											3	499
503鶏のヒナと真珠					三3							503
520大山囃動して					三8						1	520
532老犬と狩人					四7							532
562aオンドリとキツネ		136				五						562a
563ライオンと羊飼いの						五						563
563aアンドロクレスとライオン					三7							563a
613ネズミ、猫のことを協議する					四7							613
617男の胸の中の蛇					三7							617
702飼ひ葉おけの犬					三10							702
716ネズミと雌の子ネズミ、オンドリと猫				20								716
721父親と息子とロバ			一6						10			721
イソップ伝1					六9							
イソップ伝2						五						
童児と樵夫の話					三12							
兎糞と蛙の話					四1							
童児と藪の話					四4							

28 「商^{マアキユリイ}神」(A 88)

インソップを、明治期に一般的だった「伊蘇普」ではなく、江戸時代からの「伊曾保」と表記するが、仮名草子の「伊曾保物語」の系統ではない。渡部温の『通俗伊蘇普物語』や英語本に基づいていると思われる。地の文は常体の口語文であり、会話は話し言葉の口調を用いている。作者(訳者)「とろや山人」がなんびとであるかは不明である。

右にみたように、掲載誌は学術雑誌、一般誌、婦人誌、少年雑誌等と多岐に渉る。イデオロギーの面でも、ある雑誌は良妻賢母を標榜し、他方キリスト教普及を目的とするもの、社会主義を主唱する雑誌ありといったように、思想、信条を問わず、インソップは採用されている。

以上の調査結果を表にまとめた。これを見ると、複数の雑誌に採られている寓話がいくつかある。A 150の「ライオンとネズミの恩返し」は、『DOSHISHA 文学会雑誌』、『婦人と子ども』、『福音新報』、由分社系『家庭雑誌』の四誌にある。A 155「オオカミと子羊」を載せるのは、三誌だが、民友社系『家庭雑誌』には二度(一度はクルイロフ作として)登場する。その他A 46「北風と太陽」、A 133「肉を運ぶ犬」、A 226「カメとウサギ」、A 339「ライオンと野生のロバ」が三回掲載されているのなどが目につく。

四 掲載話本文

前節に取り上げた雑誌掲載話の本文を次に示す。引用に当たっては、以下の方針に従う。

- 原則として原文どおりとする。
- 原文での活字の大小は無視する。
- 漢字・仮名は原則として現行の字体とする。「辨・瓣・辯」の区別をしないなどの特異な漢字使用は、それを示すために旧字体のままとする。
- 解説不明の箇所は○で示す。
- この時期、句読法は未整備の状態にあり、種々の方法が実行されている。資料によつては、文末が行末に来る場合、しばしば句点が省略される。こういったケースでは行末(「文末」)を／で示す。
- 注意すべき箇所には※を付し、各話の末尾に注記を加えた。

『DOSHISHA 文学会雑誌』

第一三号(明治二十一年五月)

○エソップ物語抄訳

東州 散史

(1)獅子と甘口鼠

獅子あり彼れの顔上を走過ぎし甘口鼠のために、安眠より覚まされ、大に怒つて蹶起し、直に甘口鼠を捕へ將きに殺ろさんとす、甘口鼠哀願して曰く「汝若し我が一命を救はゞ、他日我必ず汝の仁恵に報ぜん」と、獅子此言を聞き、嘲笑して彼を放せり、暫時の後獅子、獵師の檣にする処となれり、彼れ大綱を以て獅子を縛し之を繋げり、甘口鼠、獅子の怒泣を聞きつけ、直に馳せ来り、先つ大綱を噛み絶ち、終に獅子に自由を与へ、

曰く「汝は曾て余が汝を助け得べしと云ひしを嘲笑し、且つ汝は余の助を希はざりし、然れども今日汝は、一甘口鼠と雖も獅子に仁恵を施し得べきを承認するならん」

散史曰く「争小利者失大利、忽小事者誤大事」と獅子と甘口鼠に於て其の然あるを知る、吾人須く獅子を学ぶべし

(2) 兎ト亀

兎あり、一日亀の足の短きと其の歩行の遅々たるを嘲笑せり、亀笑つて曰く「仮令へ汝風の如く疾しと雖も吾れ競走に於て汝に勝ち得べし」と、兎は唯だ亀の言の行はれ難きを思ひ愈よ競走に一決し、狐に依頼して、彼等が進むべき路と達すべき点を撰定せしめたり、競走の期日至ければ、彼等共に出発せしが、亀は一瞬の時間も決して休憩せず、遅しと雖も、丈夫なる歩行を以て、達すべき点に向ひ進行せり、兎は彼が性得の迅速なるを頼み、少しも競走の事を念頭にかけず、路傍に打臥して熟睡せり、終に睡より覚め、非常に疾走して達すべき点に至りし時に、亀は既に先きに到着し、彼の疲労を息めんために、快よく仮寐し居れり、

散史曰く余曾て村塾に在りし頃に、「才子頼才終不才、少年才士不如愚」と云へる詩句を習ひ、又慈母は常に余に訓へて「手習は坂に車を推す如し、油断をなせば後にかへるぞ」と戒めたるを思出せり、実に油断こそ吾人の大敵なり、世の才子俊女よ汝等の才能に誇る勿れ依頼する勿れ、世の頑愚なる子女よ汝の無能なるを歎する勿れ、吾人須らく龜歩を学ば、終に望むところの点に達せざる事なからめや、

『女学雑誌』

第一三六号（明治二十二年一月一七日）

小供談

心悪しければ身を損す

或る所に狐がありました。肴一疋盗みまして之を食はへて河の辺へ参りますと其の食へて居る肴が下に映つて見へます。然し狐は之を知りませんから熟ら／＼と眺むれば之は扱て自分の口に食はへたるよりも大きいようなり寧ろあれを取らふと思ふて其の口にしたるを離しますと惜しむべし食はへたるも映つたるも諸共に下に陥ちて水中に没れて仕舞うた。又或る狐が鶏を食はへて逃げて参ります主人は大ひに怒つて棒を持って追掛てコノ泥棒狐目が何処まででも追つて行つて殺ろして仕舞うぞと言ひ乍ら尾いて来ます。狐は何んの其様な老ばれに追附かれるものかと輕蔑し乍ら逃げて行くと鶏は食へられ乍らに申しまするはコレ狐どんモウ此うお前さんに食はへられ／＼はお前さんの者だのに盗棒呼わりされては残念では無いか何んとか甘く答へてお遣なさいと言ふにぞ実にそうだと云つ、狐は口を開らひて返答しやうとしまするとワハイ鶏は甘くも口を離れて天高く飛んで行きました。何んでも自分の心が清くないと此の様に己れの損になります。若し自から安んじて欲張つたり左もない理屈を付やうなどとせなければ狐と云ども此くの如き損には会ひませんでせう。

第一四四号（明治二十二年一月一二日）

小供談

○金の卵を産む鷺鳥

或る時一羽の鷺鳥を持つて居る人があります。大層、大切に居ましたそうです。夫は何如云ふ訳かと申しますとあの

鷺鳥は珍らしい不思議なものであつたからだと言ひます、そう
ですから之を大切にすつたのは尤ものことだと存じます。
其鷺鳥は毎日卵を一つ宛産みしましたのです、此う云ひますと
夫は何も不思議ではありませんまいと仰しやいませうが、い、此
の卵は並の卵では御座いません硬い金の卵であつたと申し
ますから夫を考へて御覧遊ばせ。此の不思議な鷺鳥は毎日
御主人に光つた金の卵を産みましたから夫で此のお方
はそんなに可愛がりなすつたのです。あなた方も此のお方は
切度あの金の卵を町に持つて行つて売りはなさるまいと思ひ
なさいませうが本當にそうでした中々売りません善く用心し
て大きな鉄の箱の中にかくして置なすつた。毎日／＼鳥屋の
中に光つた新しい金の卵を見付てはあの箱に入れなすつた
が中々一晩眠まして翌朝の来るまで待つことが出来ませんほ
どに喜こびまして一日を丸で一週間ほどに長く覚へました。鉄
の箱の卵が段々沢山になりますのを見て手を揉んで祝ひま
した／＼此の箱一パイ丈に為ならば私は世界中の一番の
金持と為れるでせうと申しました。あのお方は此の金の卵の
事しか少しも外の事を考へません、仕舞には大層欲張つて来
まして箱一杯の金の卵を一度に欲しと思ひました鷺鳥の
ヲナ力には沢山の卵がありませう最は待つて／＼居る
ことはつまりませんと思ひました。夫故或る日あの奇代な鷺鳥
を殺しました卵は何処にあるかと見ましたスルトあゝもう一
つもありませんでした。実にこのお方は愚かな人で沢山の金の
卵を産みます鷺鳥を殺したのです。

第一五九号 (明治三二年四月二七日)

小供談
不親切なる馬の話
あるとき、不親切なる馬の話。宮規子訳
或時驢馬が重ひ荷物を負ふて友達馬と一処に主人の伴を
致しましたが余り荷物が重く困つて居りました幸馬は
何にも荷物がありませんでしたから早速馬の傍に近寄り話す
には馬さん、見れば御前さんは何にも荷物が無い様だが何卒
少し手伝つてくれまいか実に重く困らないからドーソと繰
り返し頼みましたが馬は一向承知しませんから仕方なしに重
いのを堪らひ足を曳きつり一町許り行きますと倒れまし
たとすると主人は大層驚き色々介抱致しましたが憐れにも
驢馬はトートー死んでしまひましたそれで主人は荷物を
悉皆馬に載け其上驢馬の死骸を載けました。
今迄荷物もなく大層楽をして居りました馬は俄かに重い荷
物を負はせられ苦しい目をせねばならぬ様になりましたから
前きに驢馬の頼みを聞かなんだのを大層後悔して言ひます
様斯様重ひ目をするのも皆自分の不親切の報で仕方がない
が若し私が驢馬の頼んだときに尋常に手伝つたならば
驢馬も死ななかつたらう又私も斯様な目に逢はなかつたも
の実に悪いことをした私は友達を死た実に罪なことをした
と頭を垂れさも悲しさうな風をして主人の伴をして行きま
した。

第二四三号 (明治三三年一月二三日)

児 鑑

ふ み 子

羊と羊飼のはなし
アラ梅子ちゃんちよいと御覧、ソラ愛にこんな沢山蟻が居てよ、

何をしてるんだらふ、ヲヤ、此梨のしんに、囓り付て、汁を吸つてるのよ、イヤナ蟻だ、炭団の様に、真黒にたかつてサ、水をかけて遣うネー、どうするだらう、屹度吃驚して、逃て行だらうよ、蟻のあわてる所を見て遣うよツて一人の子供は、大きな柄杓に、水を一杯汲で来て、梨の実にかけ升た。スルと折角たかつて居た蟻は、寝耳に水でなくツて、御馳走半に、水を掛られましたから、あちらこちらに流れて散々に苦み、多分は其水の為に、命を殞して仕舞升た。なんと皆さん、こんな戯は、よい事でありましようか。そんならネ若しも今皆さんが、愛で、おいしいものを食べて、頭から水をあふせかけて、皆さんさんよりも強いものが来て、頭から水をあふせかけて、皆さんを何処かへ、流して仕舞ツたらだうです、皆さんは、屹度其ものを、怨むでしやう。だから虫けらでも何でも、益なきことに、殺生してはなりません。

世には随分生き物を殺したり、働かせたりして、活計を立て、居る人があり升が、そんな人でさへも、無暗にひどいことを致し升と、遂には皆んな自分の身に酬ふて来て、欲張つただけの効能が見えぬばかりか、却て自分の損を招く事があり升。むかし或る所に羊を飼ふて其毛を剪り、暮しをたて、居たものがあり升た、其男は誠に欲の深い男で、毛を剪る時は、いつでも成るだけ余計にとろふと思ふて、羊の皮にかゝるほど、深うきり升た。羊も初の間は、辛抱して居り升たが、よい事にして段々深うきり升たら、とう／＼其痛さに堪へ兼ねてこう申升た「モシ／＼親方ナゼあなたは、そんなに私を、ひどい目に合せ升か、何も私の血をお出しなかつたカラツて、血で毛の目方が、殖える訳でもあり升まいに、私はもう／＼痛くて

／＼たまりません、もし私の皮がお入用なら、何時でも差上升から、いつそ一と思ひに殺して頂戴、若し左もなくて矢張毛ばかりがお入用のなら、どうぞ皮をおはさみ下さい升な、そうでないと、私は毛さへもう／＼生へぬやうになり升から、と申たといふ事です。ダカラ皆さん、弱いものだとおもつていじめ升と、却て自分の損を招く事があり升から、大人になつても、此事は能く覺へて居て下さいよ。

第二四七号（明治二四年一月一〇日）

児 籃

熊の入婚のはなし

むかしある山の奥に住んで居升た熊の息子が、鹿の娘に戀想いたし升て、どうぞあなたのお嬢様の、養子にして戴きたいと、父鹿に申込みました。父鹿は、其類がちがひ升からツて、誠に此事を嫌ひまして、熊の様なものを婚に貰ひては、娘のみか、此親までも、迷惑する、どうかして之れを断る工夫はないか、けれ共熊は、われ／＼よりも余程強ひから、若しも熊の御機嫌を損じたならば、どんな難儀が来ようも知れず、どうしたらば、都合よく断はれるだうと、いろ／＼に思案致し升たが、やがてキツと、一計を思ひ付きまして、熊の方へ参り、謹んで申「升事には、

「今般御申入れの事は誠に有難い事で、私共鹿なま全体のはまれと存升る、就ては早速御受けを致升る筈で御座り升が、一応娘に申聞せてと存升て、娘の所存を聞升た処、娘も誠に喜び升て、仕合な事と存升が、只あなた様の、お齒や、お爪がこわいから、どうぞ其御齒を抜

き御爪をお切り遊ばし升て、其上で御越下さるならば、誠に有難い事だと申升た」

とおそろ／＼告げ升た、熊の息子は、之れを聞き升て、直にウ／＼宜しい承知々と、申し升て、爪を切り齒を抜き、これこそ、鹿の娘が、喜んで迎へて呉れるだろうと存升て、イソ／＼として参り升た処が父鹿は熊の様子を見升て、身に備へないものは、もう恐るに足りない」と申升て、熊が這入るふと致し升処を、グツと一突に、角もて遂に熊を突き出し升たといふ事です。

ですから皆さんも、能く氣を注げて、人が仮令何と申升ても、自分のなすべき事はして、人の為に、決して動かされてはいけません、何処迄も自分は自分で一見識を立てませんと、遂には此熊の様に、他の為に、なぶりものにされ升よ。

第二五五号（明治二四年三月七日）

兎 籃

草と鹿の話

ふみ子

鹿は、獣の中でも、何となく上品な、温和しい顔をして居る獣です。其角は細工物に違ふに宜しく、皮は數物となり、肉は甚味が美しう御座り升。其鳴く声は、左もあわれツばかり、能く人の感情を動し升から、昔から能く歌になど詠まれ升た。都では、態々山奥へ、泊りがけで、鹿の声をき、にゆく人もあり升が、奈良あたりに居り升と、毎晩々々鹿の声を聞く事が出来升。之れは皆さん御存知の通り、奈良の鹿は、春日さんのお遣ひものだといふて、獵師にでも殺す事を許さなかつたので、自由に群れ歩いて居るからです。

以上は只鹿の事をお話しするに就て、一寸申上た迄ですが、初是から、其鹿が、失策つた事をお話し致し升う。或る処に一疋の鹿が居り升たが、獵人に追掛られて通ぐる途があり升んでした。幸に、傍に草の茂みがあつたので、やう／＼其処へ隠れ込み升た。狩人は其辺迄追掛けて参り升たが、一向氣が注かず、まだむこうの方へ逃げて行つたものと思ふて、少しく此処を行過ぎ升た。スルト彼鹿は、まあ／＼安心といふ顔付にて、そろ／＼自分が隠れて居た辺りの、草の葉を喰ひかけ升た。食ふた草からスキが出来て向ふに見るやうになり升た。狩人は不図後の方で、バサ／＼と音がするに心付き、急に振り返つて屹度ねらひをつけ、ツドンと一発、忽ちに鹿をうち殺しました。

なんと皆さん。此鹿は、最初草のお蔭で助かりながら、其恩ある草を喰ふと、したので／＼自分の身を滅ぼしたので、それから、自業自得ではあり升んか。恩を受けて恩に酬ひず、却て恩を仇で返すやうな事をすると、誰でもこんな目に逢ひ升よ。御覧なさい、主人の目を偷んで、居眠りする小僧は、われとわがでに、頭を柱で打ち、奥様の悪口をいひ歩行く下女は、お暇が出来ても、たれも他処へ世話をしませんでしやう。是は只手近ひたとへですが、一国の大君様でも、国会議員の方々でも、みんなさうです。用ひられて、用ひられただけの事をせず、却て役目をかさに自分の勝手を計り、撰ばれて、撰ばれただけの事をせず、却て撰んだ人の仇になるやうな事をすると、皆此鹿のやうに、われと我身を損ふに至るのです。

『幼年雑誌』

第一卷第三号（明治二四年二月三日）

鶴の復讐

文通家主人 訳

これはイソップフエーブルと云ふ西洋の書物の中にある譬です、昔かじ狡猾な狐があつて友達の鶴を呼び、馳走するとき、わざと浅い皿の中へ甘い飲み物を入れて出したので、鶴は飲みたさは飲みたけれども、細長い嘴ゆえ飲むことが出来ず、しかたなしに空しく馳走にもならず帰りました。すると狐めは、甘くやつたと云はぬばかりに、一人であらふく飲み食ひし舌鼓うって喜んで居ると、次ぎの日鶴の家から昨日のおれに、名酒をさし上げたからと、呼びに来たので、欲の深い狐は厚皮にも直ぐ出掛けて行きました。鶴は昨日の意趣かへしに、狐を困らせて遣らふと、いろいろ考へた末、細長い竹筒の中へ甘いものを入れ、之を狐の前出すと狐は食ひたさは食ひたいけれども口もはいらなければ、手もはいらず。ト云つて横にすればこぼれるので、抑なしに舌を出し涎を流して見て居ますと、鶴はわざとという／＼すめた末自分は甘そうに嘴を筒の中へ突き入れ、思ふまに飲んでたので、狐は昨日自分が意地のわるいことをした、かたき打ちをされたのだと、初めて悟り、それから少しも悪る洒落などしなかつたと云ふことです。皆さんも人を輕蔑して悪るいたづらをする、此狐の様に飛んだ恥をかかれ升から、少しお氣を附けなさるがよろしうござり升

（挿絵）

第一卷第六号（明治二四年三月一七日）

太郎兵衛

蜆氣棲主人※

今はむかし江戸遠からぬ田舎に太郎兵衛とよべる農夫ありけり農業の助けにとて新たに一匹の良き馬を買ひ入れたは從來飼へるものと二匹となれり、さまで多くもあらぬ田地を耕すに二匹の馬は用なし古き馬は江戸の町に牽きゆきて売らんと思ひて一日倅の太郎松といへるを連れ二人にて馬を牽きゆく所に往來の人之を見て、「アノ百姓は馬鹿だね工馬を牽て二人して歩いてゆかずとも一人ツク乗て行けば、くたびれないで宜らう」といふを聞て太郎兵衛なる程と感心し、先づ倅を乗せて馬の口を取て二三町行く、向ふから来た人が此体を見て、「アノ兄を御覽よ、若いくせに自分が馬に乗て老人を歩行かせてゆくとは、余ッポど横着ものだね工」と言はれて太郎兵衛も其氣になり太郎松を馬より下ろして之に口を取らせ今度は自分か乗て又二三町も行くと又通りすがりの人が「アノ老爺は子供をあるかせて好い氣になつて自分が馬に乗て行くよ、憎らしい老爺だね工」といへば老爺は又もしくじつたかと倅を共に馬にのせて今度は悪くは言はれまい、いッそ初めから斯うすれば案で好かつたにと思ひながら又少しばかり行けるに道の傍に立て居たおかみさんが「アノ馬、アノ馬に二人して乗て行くとは可哀さうに、酷い人達だね工」と言ふにぞ、アノ馬でもないのでとつづきつゝ二人ともに馬を下りて今度は外に思案もなければ道ばたの森に入りて太き棒を取り来り古縄を以て馬の四足をしつかと扼りこれに棒を通して親子にて担ひ漸やく町の入口まで行きて一つの橋を渡らんとするとき、此処に遊び居たる小兒等此様を見て珍らしがり「アノアノ人は馬をかついて来た、おかしいア、アノ人」と大勢にて手を拍々として囃し立たれば馬は此噪きに愕きて、もがく

はづみに足を振りし繩が切れると南無三といふ間にボチャーンと川の中に落ちて仕舞ひましたとサ、少しも自分の考へといふ物がなく、むやみに人の言葉にのりて、い／＼と迷ふ人は余計に氣ばかり揉んで終にはつまらない目に逢ふことありとぞ、

(挿絵)

※「目次」には「蜃気楼主人」とある。

第一卷第一四号(明治二四年七月一七日)

狼と羊

愛柳子

牝羊 或日牧場より逍遙ひ出てしが 途にて 狼に追ひかけられて、既に逃るべき道もなくなりたるとき、願て狼に向ひ、吾は運つたなく最早御身の腹中の者とならん よつて潔よく一命をまゐらせん さは云へ吾また無常を感じるものせめて此世の思出てに我願ひを叶はせて賜はらずや 吾幼時より好みて踊をおどり侍るに一曲を舞ふ事を許されなば さこそ嬉しかるべく 候といひければ 狼はうち興し夫は至極面白しと踊りたまへ我も笛の名人なり笛の音きて最後を進めまうさんとて 面白く舞ひければ 犬ども途に聞きつけて、こは 何事の始まりしやと。只一参に駈け来れば 狼はあはてさばさ 牝羊の方には目もかけずして 足にまかせて逃げさりたりと云ふ

芸は身を助く幼年諸君心せよ

(挿絵)

民友社系『家庭雑誌』

第一六号(明治二六年一〇月二五日)

偶話

狼と小羊

一疋の狼と一疋の小羊ありけるが孰れも咽喉渴き一の谷川へ来りて狼は谷川の上流に小羊は狼より下流の方に各自に水を飲み居たりしが名に負ふ貪食家の本色とて狼の山賊は一時に勃々と食欲しくなり小羊に向ひ喧嘩を吹掛けたる狼「コレ、小羊奴貴様は乃公が折角甘く水を飲むのに横合から来て混ぜつ返へしやがつて一体全体如何云ふ了簡だ」小羊はブルブルと慄ひながら 小羊「コレハ、お叱言で恐入りますが何ンで下拙が尊公が仰ツしやる様な不埒を働くことが出来ましやうアレ彼の通り水は尊公の方から下拙の方へ流れて参るでは不遜の白徒尚ほもひ瘵まず 狼「コノ青二才奴ツト詰りしが不遜の白徒尚ほもひ瘵まず 狼「コノ青二才奴貴様は六ヶ月以前に乃公達のことを悪るく言ツたな」小羊「コレハシタリ滅相な其時分には未だ下拙は生れて居りませんもの」狼「ム、チヤ貴様の爺父の禿頭であつたのだから」斯くて狼は理不尽にも矢庭に小羊を噬殺ろし骨も残さず喰尽し自己が腹を肥やしける

コノ寓意談は虚妄の辞柄を以て無辜良民を害する世の白徒を描出せるなり

一人の王を欲しがる蛙群

雅典の人民が正しき律法の治下に繁栄へし頃余りに自由に偏倚りて其極終に時の政府を顛覆し而して彼等の邪魔になる旧来の諸制度を破壊せり時に反逆を謀るの徒党国内此処彼処に起りピストラットと云へる反逆人は暴力を以て雅典の

市の守護なる城を乗取り国家の権を自己の手に握りしが雅典の人民は哀れなる彼等の奴隷の境遇を悲しみけり是れ反逆人ピシストラットの残酷たらしきがためにあらで彼等が馴れぬ束縛に身を窘しめらるゝことの最と堪えがたく彼等の眼に映りしものから此の如く雅典の人民は彼等の不幸を嘆きしかばエソップは寓意談を設けて彼等を慰め諭せり
一個の沼の面を自由自在に彷徨き廻はる蛙の一群ありけるが彼等は彼等の規律正しからざる習俗を抑制ふるに足るべき氣力を備ふる一人の王を吾儕に降し玉へと大声を發げて諸神の父なるデュピテールの神に願事しけるがデュピテールの神はクス／＼と打笑ひ玉ひ何んの才能もなき一人の王を手へ玉ひしがコノ王は不意に然かも騒々數物音して沼の面に墜落ち玉ひしにぞ臆病なる沼の住人等はアツト言ツて青くなり皆一同に小さくなりて片隅に控居たり話頭一転下界へ天降り玉ひし大王には時刻移るまで泥土の中にモグリ込みて在せしが一足の蛙怖はぐながら静ツと水面に頭を擡げ大王の人物を窺ひ居るたりしが頓て仲間の者共を呼立て今は最初の恐怖は痕方もなく消失せ無礼にも我劣らじと東西南北に遊び廻はり或は浮木の上を飛んだり跳ねたり思ふ存分に振舞ひて大王に恥辱を与へたる揚句の果に彼等はデュピテールの許に委員を派して現在の王は能無しなれば他の王と交換へ給へと請願せしが今度前の王に更迭りてデュピテールの神より送られしは一足の恐ろしき蛇なりしが新來の王は畏ろしき口を開らき片ツ端より蛙共を吞め始め玉ひしが如何で蛙共は蛇に敵対ひ得んや如何に身を挽けばと如何で生命を完ふし得べき怖ぢ畏れて今は声さへ得立てず其処で彼等は内々

デュピテールの一子メルキユールを以て彼等の上に憐憫を垂れ玉へとデュピテールの神に執成さしめけるがデュピテールの神「汝等彼の善王を王とすることを拒みし故厭でも今度は前の王より惡しき王に隨身せねばならぬぞよ」と答へ玉へり
エソップは尚ほ語を添えて曰くエソップ「オ、汝市民等よ汝の現在の苦難を忍べよ若し然らずして他に求めんとすれば恐らくは以前より惡しき事物來らん」

第一七号（明治二六年一月一〇日）

クルイロウフの寓意詩

笛仙子 訳

鴉と而して狐

もう幾度世間に語談の卑しい事、わるい事を言つた歎知れないが、其で居て昔も今も同じ事、語談使は矢張甘い穴を見附ますよ。

鴉が何処から歟牛酪の片を拾つて来て椶の木にとまり込み、其を喫やうとして喫もせず、くはへたなりで何歟考へて居ました、此時生憎向ふを狐が通つたが、牛酪の香が紛としたので、彼足を止めて見ると鴉が椶の木へ止まつて、今や牛酪をたべやうとして居ます、甘さうだな！其処でおべツか使、爪立足で木の下へ立寄り、尻尾をふり廻はしながら、傍目もふらず、欲しさうに鴉の方を見て居たが、やがてさもやさしさうな声で、愛らしい者よ、まあ何といふ美しいのだらう、君は、襟元といひ、目元といひ、真成に物語にでも在りさうだ、其鼻の風から、咽喉の具合、何といふまあ様子の宜のだらう、定めし声も天人の様に宜からう、まあ一ツ歌ひたまへ、其様に羞しがらず

に、君の様に美しくては、佞度歌も黒人だらう、真成に君は鳥の中の王だぜ、と言ひました、音楽家褒められて、面くらひ、嬉しさで息もつまる斗、狐の諂諛にふわと乗ツて、一声くわうと鳴きました、其処で牛酪は口より落ちました。おベツか使はまあ此様ものです。

(挿絵)

蛙と而して牛

蛙が野原で牛を見た所、彼は中々の羨望家故、一番牛と太り加減を比べ合ツて見やうと思ひ付ました、「如何だい、見てくれ、兄弟、予と牛とどツちが太ツて居る歟」他のがいふには「否、遠く及ばないね。」「さう歟、まて、今もツと膨れて見せる、如何だい今度は、随分太ツただらう?」「え、何だ歟同じ様だぜ。」「さう歟、其では今度は如何だい。」「矢張先の通りだ。」「其処で羨望家が、膨れたの膨れないと言ツて、一生懸命ふくれました、然し如何斗膨れても、牛程ふくれる事は出来ませんでした、而して余りに腹を張たので、とうとう腹が張裂て死んでしまひました。

此様な例は世間には幾らもあります、ですもの何で驚くに及びませう、小商人が名高い紳商の様に奢り散したり、貧乏士族が貴族の真似をしたりするのは。

(挿絵)

(非イソップの一話省略)

第一八号 (明治二十六年一月二五日)

寓意詩

クリイロウフ氏作

笛 仙子 訳

犬と獅子、と狼、と狐、と如何いふ理歟隣合て住んで居た、而して此様約束をした、獸狩は互に知らせ合ひ、獲物は等分に分けやうと。其から後のいさくさは、私も知らないが、斯いふ事丈は知て居る、第一番に狐が鹿を狩得たので、朋友の所へ使節を立て、獲物を分けやうと言てやツた。獲物は真にわるくないのだ。で皆 やツて来た、獅子も来た、獅子は爪をぐいと立て、坐中をじつと睨み廻はして、獲物の分方を見積ツて居たが、やがていふには、おい兄弟、四ツに分るのだな、よし、と鹿を四にひき裂きて、さあ分るから見てお居で、宜かい、此丈は約束通り予のだよ、其から此方は、予が獅子だから、無論予のと、其から又此方は、予が一番強いから予のと、宜かい、其から誰でも之へ、一寸でも手を(其実足を)かけやうものなら、其者は生て其場から立てないのだ。

(挿絵)

(非イソップの一話省略)

第一九号 (明治二十六年二月一〇日)

寓意詩

クリイロウフ氏作

笛 仙子 訳

鈴虫及蟻、踊好の鈴虫が、時候の好夏の間は、好気になツて面白がり、歌計り歌ツて遊んで居たが、ふり向た間もあらばこそ、冬はもう目の前です、涼やかな野も霜がれてしまひ、天高く晴渡ツた

日も何処へやら、木の葉の蔭には何時もまあ、おいしい食物（鈴虫の為めには）美しい家、沢山有ったが其も皆無！寒の冬には御用心、ひもじくなつてまゐります。鈴虫ももう歌はお廃だ。其苦。空ッ腹をかくて誰が又、歌などいふ了見を。きらひな氣病で倦じ果て、鈴虫蟻の所へ駆け込み、「兄弟頼む、力づくまで実ついでくれ、永くとは言はぬ、たつた春迄、食はせて、被せてくんなされや。」おツと兄弟、其は少々偏痴氣格だの。全体夏中稼だかの？」と蟻は鈴虫に尋ねました。「どうして兄弟、其所歟、私の方では朝から晩迄、柔かな、綺麗な草の上で、飛んだり、はねたり、歌ツたり、其で大々目がまはつて仕舞ツた。「おや其では手前は……」「夢中で夏中遊んで居たのさ。」「夏中遊んで？其では今になつて困る筈だ。自業自得だ。家はおかれぬ、何処へでも往て、勝手に踊るともはねるともしろい！」

狼 及び 小羊

強者の前では弱い者はいつでも罪人で、其例多く歴史にあります、我々は歴史は書かないが、然し寓意詩に其事は歌て有ますよ。

ある夏の事で、小羊が小川の辺へ水を呑に往つたが、飛んだ災難に出ツくはしました、といふは空腹の狼が、恰度其処へかけて来て、小羊を一目、好獲物と近寄りました。然し悪い事も、せめて人前丈は、もツともらしく見せかけやうと無理な理屈を我鳴ります。「これ、何をする、不届な！其様穢らしい鼻頭を、予の飲む水の中へ突込んで、砂や、芥で濁す歟？其様太い事をすとの（ツ）、手前の素ッ首を引込抜くぞ！」あゝまうし狼様、狼様閣下、閣下が若 私の建言をお許し下さ

らば、私は申し上ります。私は閣下のお立の所より、百歩も下で居ます、其で何如して濁す事が出来ませう、此儀を御勘免に相成れば、其御立腹は聞えぬ様に存ます。」「と左様ぬけぬけ迂詐をいふの歟！此横着者奴！其様太い事が、此世の中にまたと有らうかい！これ、覚えて居るぞ、去年も手前は、此処で予に何だかで乱暴をしたぞ。え、如何だ隊長！予はまだ忘はしないぞ！」是はまた途法もない、御勘免下さい、私はまだ生れてから一年になりませんのに」と小羊は言ひました。「さう歟。其では手前の兄貴で有つたらう。」「否もつし、私には兄貴は有ませんものを。」「左様歟、其では朋友歟、親でも有つたらうが、誰で有らうと、兎に角手前達の種族は、種族だ。全体手前達の種族は不届だぞ！仲間の中が羊で有つたり、牧羊者であつたりだ。而してどうせ予なぞの事は、誰でもよくは思つて居まい、出来るなら仇でもしてやらう位だらう、太い奴だ！其罪を予は今手前に向て尋問するのだ。」「ですが何を私は悪い事をしました？」「黙れ！予はもう聞飽た。予には手前の悪事を穿議する様な暇がない、青二才奴！手前を見てから、予は手前を食ひたくなつた、食ひたくさせたのは手前だ、其が全体手前の罪だ。」と言ふや電、薄暗い林の中へ一さらひ。

（非イソップの一話省略）

寓 言
横柄なる 鵲と孔雀
他の優れたるを利用ツて自己の光譽を計ることなれ寧ろ汝の境遇に満足せよエソップは吾人に好き範例を遺せり

一羽の鶴、あり益もなき驕慢の心、増長し其処辺に落散りし孔雀の羽を拾ひ集め、自己の身体に着けてシタリ。顔に自己の仲間の者共を眼下に見下し、綺羅びやかなる孔雀の群に仲間入りせんとて出掛け行きしが、彼等は不注意なる鶴の身に著けたる麗はしき衣裳を剥取り、鶴の化の皮を露はし、皆一斉に嘴を揃へて突出し、しかば鶴は苛らき目に逢ひ、這々の体にて自分の仲間の許へ逃帰りしが、此処にても亦仲間の者共に刎付けられ恥辱の上に恥辱を擧げり。其時以前彼が眼下に見下したる仲間の一人は、彼に向ひ仲間「若し汝が私共と一処に生活し、天から授かつた丈のことに満足して居たら第一孔雀から彼様な虐待を受けたら其不幸の中にマタ私共から刎付けられやしないんだ」

河を渡る犬
欲を渴き他の財物に目懸る者は反つて自己の財物を失ふべし
口に一嚙の肉を喰はへ河を渡る一疋の犬ありけるが水面に映る自己の姿態を認め他に犬ありて自己と同様に肉嚙を喰はへ居るものと思ひ込み強欲の犬は之れを横奪らんとせり去りながら彼の強欲は其目的を外れけり。今しも彼は敵の兵糧を奪ひ取らんと敵を目掛けて一声鋭く唳り掛らんとする塗端に自己が口に喰へし餌食を落取し、剩さへ自己が横奪らんとしたる敵の兵糧をも得ること能はざりき
稚き牝牛、牝山羊、耐忍強き牝羊及び獅子
大いなる権力ある者と共同に事を成すは決して安全の策にあらず左の寓意談は能くこれを証明す
稚き牝牛、牝山羊及び耐忍強き牝羊の三人は林の中にて一

疋の獅子と仲間を組みめて稀有なる一頭の大鹿を捕らへけるが、借熱功を論ずるの一段となりて獅子は一同の者に打向ひ獅子「諸士聞かれよ拙者は第一番に鹿を捕らへ功名を顕はしたり何故なれば拙者の姓名は獅子と申すではらんか第二諸士は彼の獲物を拙者の所有にせんでなん何故なれば拙者は勇いではないか第三彼の獲物は拙者一人の専有物なんだ何故なれば拙者は一番強いではないか第四には彼の獲物に触るが最後誰彼の容赦はない」此の如く獅子は自己の權威を弄びて共同に獲たる分捕物を自分一人の専有物となせり

狐と張子の頭
一疋の狐偶然芝居に使用ふ張子の頭を見たりしが狐「才、如何も美しい頭だ、だが彼の頭には脳髓がないわい」この寓意談は自己の財産のために世間の尊敬と榮譽を一身に荷へども普通の感念なき人々に適合るなり

狼と鴻の鳥
自己が施したる恩恵に對して悪人より返礼を受んとするは二重の過失よりマシ恩恵を施すべき価値なき惡物に恩恵を施こしたる是れ第一の過失なり、時宜に依りては生命を失ふべき危険を冒す是れ第二の過失なり
一疋の狼あり咽喉に骨立ちて苦痛に堪えざれば其難儀を拯ひ呉る者には恩賞を与へんと約束を立てて江湖に救助を求めけるが鴻の鳥は狼の誓言を信じ自己の長き頸を狼の口中に挿入れ首尾能くこの危険なる療治を仕遂げたれば約束通り恩賞に預らんことを請求しけるが其時狼は鴻の鳥に向ひ狼「この恩知らず奴貴様は乃公の口中から無難に貴

様の頭を引出しておきながら夫れを有難いとも思はないで報酬を強請るとは何シのことだ」

野兎と雀

自己の要慎を懈りながら他に向つて忠告するは阿房なり
一足の野兎驚の爪に五体を劈れ七顛八倒の苦痛をなして悲鳴を上げ居たりしが一羽の雀この有様を見て野兎を嘲り始めた雀「オヤ／＼如何したもんだね野兎さんと郎さんは彼／＼なに足の疾いのを自慢して居たツけが、和郎さんの素早い足は何処に着いてるけたね」斯くて雀の談話を続け居れる間に何処よりか思ひ掛けなく一羽の鷹飛来り雀を掴み彼の泣き叫ぶにも遠慮会釈もあらばこそ忽ちの内に雀の息の根を止めたり死に瀕りたる野兎はこれを見て野兎「コレ／＼雀貴郎ハツイ今しがたまで自分は無事息災と思ひ私の不幸を笑らツたが貴様も矢張り哀れな最後を遂げるではないか」と言いて生前の慰を得雲時苦痛を忘れけり

狼と狐、狼の裁判を受く

廉恥心なく居常人を欺き世を欺く者はヨシヤ其真実を言ふ時にも人は真実としてこれを信ぜずエスツプは短き寓意談を以てこれを証明す

一足の狼 あり自己の財物を盗まれたりとして一足の狐を相手取りけるが狐は左る不都合を働かし覺へなしと言張りて承知せず其時一足の狼は彼等の争論を裁判する役目を担任せ原被両造の辨論を聴きたる後ち狼判事は左の如き宣告を為せり狼「狼 余は其方は其方が訴へ出たる財物を盗まれたりと思料せずマタ狐其方は辨を巧に身の潔白を言張れども余は其方の盗取を以て罪あるものと認定す」

第二〇号（明治二十六年二月二五日）

寓意詩

ツミーツリエラ氏作

嵯峨の家主人 訳

ツミーツリエラ氏は、十八世紀の下半期より十九世紀の上半期に於て、露西亞の文壇に其名を轟かしたるの詩人なり。彼は好んで万有の美を歌ひ、自然に近き單純の生活を歌ひたるが、其詩は流調輕妙を以て優りたりき。彼の詩作中寓意詩も少からざるが、其はクルイロウフの如く、國民特性の原素を含めるものにては有らざりき、クルイロウフの如く、平民的の俗語を以て書かれしにてはあらざりき。されど其辭の俗体なると、其文の平易なるとに依りて、今に至る迄露西亞國民の愛読する所となる。今 試みに訳して茲に掲ぐ、

鶏と猫と而して鼠

嗚呼小兒よ、小兒よ！如何に貴君方の年頃は危き事ぞ有らう歟！まだ世間を見た事のなき小兒が、危ふく災難に遇ふ所でした。御聴なさい、今彼が其事を一族に語る所を。

私は窃我々の穴を抜出て、彼方の山を越へ、四方を見廻はして、もう予だとして若鼠、何時迄小兒で居るもの歟、さう／＼家に斗は居られない、見るが宜、今小兒でない所を見せてくれるから、と不丁見にも、國境を越へて驅出しました。かけ出してまだ五六歩、忽ち二ツの獸に出遇ひました。何といふ獸歟、其は知りません、然し一ツは如何にも柔和な、如何にも善良さうな者で、最も靜に歩いて来たが、其貌は如何にも愛らしい風でした。今一ツは何となく憎体な風で、變に小や

かましく叫ぶ質でした。全身羽が生て居て、尻尾は釣針の様に曲て居て、其上額の上に赤い、火の様な赤い瘤が有て、おまけに二ツの手は、とんと飛ぶ様に出来て居ると見え、始終おかしくふり廻はして居ました。而しておかしく喉を張て、見廻はす風の恐ろしかつたこと！私は何も憶病ではないが、之を見るもと真暗三宝、足に任せて逃しました。嗚呼実に残念です、若し彼奴さへ居なかつたならば、私は今一個の方と朋友になる所でしたに。其又今一個のと言つたら、如何様に静に其むく毛の様な尻尾を振て居ましたらう！又如何様に親切の風が、其目の中に現はれて居ましたらう！尤も火の様に光つては居たが、如何様に温順な柔和さうな目元で、熱心に私の方を見詰て居ましたらう！其に毛と言へば私の様に柔かでも尤も頭の所は班で、肩に添て筋は有つたが、然し耳は我々の耳と同じ様で、実に好た風で有りました。私は其風に依りて判するに、彼は多分我々上等社会、貴族たる鼠に向て、同感を持て有らうと思ふのです。

と斯う小鼠が言ひました。其時母鼠が小鼠を論して云ふには、

これ我子よ、お前は其様に他の外貌に依りて賞めちぎるが、其柔和さうなのが猫と云て、我々の敵だよ。其親切さうな風の下に恐ろしい毒をかくして居のです。又今一ツのは、鶏と言つて、其こそ真個に温和い者で、何の害をもなしはしない。又恐つた事などは、唯の一度でも有はしない。のみならず、時々我々の食物にさへなります。是からもある事、決して／＼外貌を以て他を取るのでは有ませんよ。

此寓意詩、実に巧ならずや、彼当世の輕薄才子、都人の如き

は、其衣服は如何に美なりとも、其風俗は如何に風流なりとも、其言語は如何に圓滑なりとも、其挙動は如何に礼節ありとも、其言ふ所は如何に親切なりとも、之を信するは最も危からずや、其に反して彼田舎の農夫の如きは、其衣服は如何に濫褻なりとも、其言語は如何に田舎調なりとも、其挙動は如何にむくつけなりとも、其心には実意の宿るに非ずや。此寓意詩、最も巧に此種の意味を諷す。最も面白しといふべし。

(非イソップの二話省略)

『婦人と子ども』

第一卷第七号 (明治三四年七月)

かめと うさぎの かけっこ

『うさぎさんの ねているうちに さきえ かけていつて 一ばんに なりましょー』

(挿絵)

第三卷第二号 (明治三六年二月)

●イソップ物語

牧羊 羊 訳

其一、獅子と二十日鼠

一匹の獅子が、心地よく寝て居ると、二十日鼠がやつて来て、五月蠅く獅子の顔の辺を駆け歩いて目を覚まさせたので、怒るまいことか、不意起き上つて鼠を引つ捕へて踏み殺さうとしました。すると鼠は、さも悲し相に謝つて『もう一生命だけお助け下さる事なら、屹度御恩返しは致します』といひますの

で、獅子は　なーに、鼠のくせに何をいふかと云ふ風に笑ひながら宥してやりました／＼この事があつてから暫くして、この獅子が、獵夫の慥らへた係蹄に引つかうて、太い綱で身動きも出来ない様に縛られたもんだから、さすが、獸の王も何事も出来ないで、たゞ大声で吠えてばかり居ました。その声を聞きつけて、以前の二十日鼠が出て来て、其綱をしきりと齧り切つて、とう／＼獅子を助けて、さて、申しますには、『先日、お前さんは、私の様なものから恩返しなどを受けない積りで、いつか私がお前さんを助けることもあらうといったのを、お笑ひなすつたじゃありませんか、今こそ、お前さん　二十日鼠だつて獅子さんを助ける力があることが、お分りになつたでしよう』。

其二、狼と仔羊

狼が或晩羊小屋から迷ひ出た一匹の仔羊に出遭つて、すぐにも、捕つて食はうかとも思つたけれども、何か、自分が仔羊を取つて食うだけの権利があることを知らせて置いて、とても食はれても仕方がないと諦めさせてからにしようと思つたから次の様に咄しかけた『小夜さん　去年だつたか、お前さん大變僕を輕蔑した事があつたけね』すると仔羊は　さも悲し相に申しました『マゝ、あんな事を、だつて妾、其時まだ生れてなかつたのだわ』これは失敗つたと思つて、狼は又『そー／＼お前さん　いつも僕の所の草を食つて行くね』といふと仔羊は『あら、まあ、妾まだ草なんか食べられないのよ』狼は又やり損つたと思つて今度は、『そーだつた、お前さん　僕の所の井戸の水を飲みに来たつけね』といふと、『いーえ、妾水なんかまだ飲まないわ、だつて母羊さんのお乳があれば、外に食ふものも飲むものも要らないのよ』そこで、狼は恐ろしい目を光

らせて、不意仔羊を引つ捕らへて、たゞ一口に食べて仕舞つた、で独り言を言つて居ます、『まゝ、いーえ、お前さんは、そんなに色々辨解はしたけれど、どの道僕は夕飯なしには済まされないからね』

悪人は悪い事をするに、何か知らん口実を見附け出します。

其三、驢と鈴虫

鈴虫が毎晩／＼善い声で鳴いて居るのを、驢が大變に感心して聞いて居ましたが、どうかして自分もあんな善い音楽を歌う様になりたいもんだと思つて、鈴虫に、一体何んな食物を食べて、そんな善い声になつたかと、聞いた所が『露ですよ』と皆の鈴虫が答へました。そこで驢馬は、露ばかり食べて他の物は一切食べないで居りましたが、すぐとお腹がペコ／＼になつて餓死した相です。

(以下次号)

お日様と風

や　よ　ひ　生

或る冬の朝、お日様と風とが、どちが、ゑらいかと言つて、やかましく、喧嘩をして居りました。丁度、其の時、暖かそうな大きな外套を着た一人の旅人が通りかゝりましたから、二人は相談をして、彼の旅人の外套を脱がしたものが、一番ゑらいものにしようといふことになりました。そこで、風は、一生懸命になつて吹き出しました。すると、旅人は、驚いて、外套の前を押さへて、中、腰になつて駆け出したから、『之では行かぬ』と思つて、風は躍氣となつて、ある限りの力を出して、

聞きません／そこで蝙蝠は、決して鳥ではない、鼠の類だとい
て、やつと助けて貰ひました。夫から暫らくしてこの蝙蝠が、二
度目地面に落つちて、今度は他の鼯鼠に捕へられました。で、
前と同じ様に、命を助けてくれと願ひますと、其鼯鼠は、鼠
とは特別仲が悪いから、助けてはやれないと申します。そこで
蝙蝠は、決して鼠ではない、たゞ蝙蝠だといつて、二度目助かり
ました。

機に臨んで、事を処する人は賢い

其七 鶏と宝石

一羽の雄鶏が、自分達の雄鶏の為に、餌をあさつて居た所
が、不図、立派な宝石を発見しました／そこで雄鶏が宝石に
申しますには、『お前さんを拾つたのが、私でなくて、遺し主だ
つたなら、夫こそすぐお前さんを拾ひ上げて、どれ程大事にし
るかも知れないに、不幸にして、私は お前さんを拾つた所
が、何も目的はない。夫よか、粟粒一粒でも見附けた方が
余程、私しのは宜かつた。』

其八 燕と鳥

燕と鳥とが、どちが羽が美しいかといふので、喧嘩をし
て、果てもない。そこで、鳥がどう／＼次の様にいつて、お仕舞に
しました。『君の羽毛は、なる程美しいが、夫は春だけのこと
だ、而し僕のは冬になると、大変暖にしてくれるからな』

其九 獅子王

野山の獣どもが、獣界の王として獅子を戴くことになり
ましたが、此獅子はなる程王者の徳を具備へて居つて、压制だ
の残酷などは少しもしませんでした。そこで、其獅子はだん

／＼と政治を施して居ましたが、或時其領分の鳥や獣の
大集会を開きまして、森の平和の為に、鳥獣界の大同盟を
することを宣告しました。此同盟では、狼も仔羊も、豹も仔
山羊も、虎も鹿も、犬も兎も、一切協同の生活をして、永遠
の平和を保つて行かねばならぬといふのであります。夫を聞い
て、兎は手を拍つて喜びました。『オー これで、どんなに弱い
もの、強い者の側に心配なしに、一所に居られるのだ、我輩は、
どんなに永く、此同盟の出来るのを待つて居つたか知れない』

其十 主人と犬と

主人が今旅立に出やうとすると、門の前に犬が脚を踏んば
つて立つて居るので『オヤ／＼ 此奴何を欲しがつて立つて居る
のか、もーすつかり用意が出来て居るに、貴様ばかりだ、さー、
直ぐとお供をして来い』犬は尾を掉りながら答へました『な
に、旦那様、私しは 疾つくの昔、用意が出来てござ、旦那を
待つて居る所なんですよ』

愚図々々する人は、きまつて、自分よりもさつさとする人の
事を 愚図だといひます。

第三巻第四号（明治三六年四月）

伊蘇普物語

其十一 蟻と鈴虫

ある冬のお昼頃、丁度天氣がよくつて暖な時、大勢の蟻がよ
つてたかつて、夏中貯へて置いた食物を穴から出して来て干し
て居ますと、一匹の鈴虫が、饑饉で以て、お腹をペコ／＼にして

牧羊 訳

やつて来まして、ビーが少し食物を頂戴といつて、蟻に願ひました。すると蟻どもが鈴虫に尋ねます『何故お前夏の中に食物を貯へなかつたの』鈴『だってそんな暇がなかつたもの』蟻『じゃー何して居た』鈴『僕は毎日歌を歌つて居たからなあ』そこで蟻どもは一度にどつと笑ひ出しました。『ハッハ、夏中丸で歌つて暮らした程の馬鹿なら、冬になったら、飯も食べないでお床の中で跳つて居るのが普通よ』

其十二 兎と亀

ある時、兎が亀に行き遣つて『まあ、何といふ短い足だらう、そして歩き方ののろい事といつたら、どうだ』といつて冷かしました。すると亀は、ニコニコ笑ひながら『そりや、君が風の様に速いかも知れないが、駆けつくらになつたら、僕が負けやしないよ』兎は夫を聞いて、馬鹿な、そんな事が亀さんに来るものかと思つたから、すぐと駆けつくらをして見ることに決めました。そこで二人は、狐を呼んで来て評定官になつて貰つて、向うの松の木を目標にして、一二三で駆け出しました。所が亀の方は一生懸命になつて、のろいけれども、決して休まないで真直に目標がけて走り出しました。兎はもと／＼と駆けけるの、速いのが得手なもんだからな、亀なんかには負けるもんかと思つて仕舞つて一向に気を附けない、どう／＼道側で腰を据へて眠り込んで仕舞つたのです。暫くして、目を醒まして『オヤ』と思つてさー夫から駆け出した／＼一生懸命に飛んで行つて、目標の所へ行つて見た所、が、もーと／＼の昔しに亀が来て仕舞つて居つて、『ア、疲れた』といつて休んで居た所でしたとさ。

其十三 炭焼と布澤し人

炭焼が自分の家で、毎日／＼家業をして居ましたが、或日のこと途中で、布澤し人に出遭つて『ビーだ、僕の所へ来て一所に、商売をしたら。第一、一軒の家を二人で持つのだから、余つて程経済になるぜ』と申しました。すると、布澤し人は『折角だが、もう一處さうよ、二人で一所の内ぢや、とても商売が六ヶしいから、なぜかといつてごらん、僕が真白に布を澤らすとすると、君はすぐ、炭で以て又真黒くしてしまふからな』

牛は牛連といふことがあります。

其十四 漁夫の音楽

大変な音楽好きの漁夫が居まして、ある時、笛と網を持つて魚取りに行きました。先づ海の浜から突き出した岩の上に上つて、網を足の下に括げて置いて、しきりと笛を吹き出しました。屹度魚どもが、此笛の面白さに浮れて、独り手に網の中へ跳り込むだらうと考へたのです。所がどの位吹いても、中々魚が跳り込んで来さうにもない。どう／＼待ち疲れて、笛を側に置いて網を海の中へ投げて見た所が、さー取たれとも／＼取れたとも一度にどつさり網にかうた。岩の上に引き上げて見た所が、魚はピン／＼網の中で跳て居る、そこで漁夫の曰くさ『全体貴様たちは、間違つて居るではないか、折角己が笛を吹いてやつた時には跳らないで居て、己／＼めてから面白さうに跳るてへのは、随分馬鹿な話だな』

第三卷第五号(明治三十六年五月)

伊蘇普物語

其十五 蝗取り

ひとり 一人の子供が蝗取りに出かけた。大分数多く取つてから、一匹のサソリを見つけて、夫を蝗と間違へて取らうとして、ひよいと手をさし出すと、其サソリめが、刺をどがらかしていふには、『オイ君、僕の身体に指一本でも触るなら触つて見よ、僕をつかまへることが出来ぬばかりか、おまけに折角捕つた蝗まで失くして仕舞ふよ』

其十六 犬と影

一匹の犬が口に一片の肉を喰へて、水の上の橋を渡りかゝつて、自分の影が水に映つたのを見て、夫を、他の犬が、自分の肉の二倍もある肉を喰へて居るのだと思つた。そこで、其大きな肉を奪はうと思つたので、自分の口に喰へた肉は捨て、仕舞つて、恐ろしく影を目がけて食つてかゝつた。其為に此犬は兩とも失つた、即ち取らうとした水中の肉と、夫は勿論自分の影だつたからして、夫から、自分の持つて居たのと、夫はすぐと水に流されて仕舞つたからして。

其十七 仁王と牛追

一人の牛追ひが、牛に車を牽かせて田舎路をやつて行つた処が、忽ち泥濘の中へ、深く車輪を沈めて仕舞つた。処が、此百姓は、たゞ吃驚するやら、周章するやらで、其車を見つめて立つて居る許り、何もしないので、たゞ／＼大声をあげて、仁王様に出て来て助けてくれる様にと叫んだ。するとそこへ、例の仁王様が出て来ていふには『オイ／＼其車の輪の中へお前の肩を入れるのだ、夫から牛を追つて見よ、夫からして以後は、自分の力で厭くまで骨を折つてからでなくては、此方に助を求めては相成らんぞ、夫でなくつて、只管助を求めること許り考へたつてとても、駄目だと心得よ』

みづか おのれ たすけ
自ら己を助くるは最良の助なり

其十八 むぐらの母子

一体むぐらもちといふ獣は産れ附きから盲目なんですが、或時のごと御つ母さんに向つて『おつ母さん、妾を度見えるのよ』と申しますから、おつ母さんは其心得違の証拠を示してやらうと思つて、其前へ胡桃の実を五つ六つ並べて聞きました『そんならお前-これは何ですか』すると子は、夫は石塊です』と答へた。そこでおつ母さんが歎いて申しますには『オや、マー、お前は、盲目であるばかりか、物を嗅ぐ力もなくなつて仕舞つたらしいよ』

※「くるみ」の「く」は転倒している。

其十九 牧畜者と仔牛

一人の牧畜者が、森で沢山仔牛を飼つて居たが、或時一匹の仔牛が見えなくなつた。だん／＼と探して見たが、一向探し当らないので、どう／＼神様に誓を立てた、其誓といふのは若し仔牛を盗んだ賊だけでも見附けたもんなら、森の神々へ一匹の仔牛を殺して供へようといふのです。夫から間もなく、小山の方へ上つて行つた所が、丁度自分のすぐ足下に、一匹の獅子が彼の仔牛を捕へてムシヤ／＼食つて居る。之を見て牧畜者は忽ち慄へ出して、天に向つていつた『賊を見付けたら、森の神様へ仔牛を殺して供へますと、たうた今私は誓ひました、併し丁度今 私は其賊を見附ましたが、若し此賊から私の命さへ助かることなら、失つた仔牛は愚か、大きな親牛までも附け加へて進上致しましょう。』

※「へは」と読んだが、「へ」は「く」を九〇度回転してしまつたか。「進」のルビ「しん」が上にずれている。

第三卷第六号(明治三六年六月)

伊蘇普物語

牧羊記

其二十 仔鹿と母親

小さな仔鹿が或時母親に申しますには、『おつ母さんは大から見ると大きくはあるし、速くはあるし走ることも甘しい、おまけに二本の角もあれば大丈夫で、ないか、夫におつ母さん、いつでも臍大どもを一目見ると、まーあんなに狼狽々々で逃るのは、どうしたものです』すると母親はニツコリ笑ひながら答へました。『全くお前の言ふ通りだよ、夫は私百も承知して居る、けども私はね、一匹でも犬の吠える声を聞くと、もー弱つて仕舞つて、一生懸命に逃げたくなるのだから』

口前の議論は臆病者に勇氣を与へることが出来ない。

其二十一 驢馬と狐と獅子と

驢馬と狐とが互に自家の利益を保護する目的から攻守同盟を結んで、他獸を狩りに山へと出かけました。所が出かける間もなく一匹の獅子に出くはしました。狐は危険の迫つたと見て取つて、すぐ獅子の側近く倚つて、若し私を見逃がして呉れるといふことなら、あの馬鹿な驢馬を生擒にして進ぜませうと申し出した。獅子は夫を聞いて、然らば其方丈は許し遣はさうといふ事になったので狐は驢馬を連れて行つて、どう計略で以て深い／＼陥穽の中へつき入れて仕舞ひました。夫まで獅子は黙つて狐のする事を見て居たが、もー驢馬は逃げつこなしと決つたので、すぐ狐に跳りかゝつて、たゞ一口に食つて仕舞つて、其後でゆる／＼と又驢馬の御馳走に預りま

したとき。

其二十二 蠅と蜜壺

台所の隅に蜜壺が、ひつくり返つて居た所へ、沢山の蠅がいー香を嗅ぎつけてやつて来て、蜜の上に留つて腹一胚食つて居ました。さて帰らうとした所が、皆脚が蜜にクツついて仕舞つて飛ぶことも出来なければ身動きも出来ない、もー皆な死なうとする際になつて一度に叫び出しました。『まー何んと我々は馬鹿な動物だつたじやないか、少し許の快楽の為に今に死なねばならなくなつたとは』

其二十三 牝獅子

或時野の獸どもが倚つてたかつて議論をしました／＼一度に一番数多く子を産むことの出来る獸は誰だらうといふ議論だが中々決らないので、手つ取り早く牝獅子の所に行つて裁判して貰うのが第一だといふので皆で揃つて牝獅子の前に出かけました。だん／＼話して居る中に、『夫はさて置き、あなたは何匹お生みになりますか』と聞くと、牝獅子はニツコリ笑つて『何だつて！分らないじやないか、妾はたつた一人さ、けども其一人といふのはね、まつたく立派な獅子の子だよ』物の貴きは、数にあらずして其物の価値にある

第三卷第七号(明治三六年七月)

伊蘇普物語

牧羊記

其二十四 農夫と蛇

ある冬の日に、一匹の蛇が寒さの為に硬くなつて凍えて居ると、農夫が夫を見て、不憫に思つて、自分の胸の中に入れ

て温めてやつて居ました。蛇は人の温かさで、すぐ元氣付いて来ましたが、夫と同時に自分の悪い性質を出して、いきなり、恩人の胸に食ひ付いて、手烈い傷を負はせました。そこで農夫は絶え／＼の息をついて、『私は、こんな悪漢に憐憫をかけたのだから、この罰を受けるのは当り前のことだ』

恩知らずには最大の恩恵も無益なり。

其二十五 人間と獅子と

或時人間と獅子とが、道連れになつて、森の中を旅行して行きましたが、途中で、お互の自慢話が始まりました。一方が、『そりや力だつて、勇氣だつて人間の方が強いに定つて居る』といふと、一方は『なゝに獅子の方が強い』といつて、お互に争つて居ります中に、一つの石像の立つて居る所へ来しました。其像は一匹の獅子が一人の人間の足の下に踏まへられて居る所な人です。そこで人は『どーだい、人間様は違つたもんだろう、この通りだ、獸王なんて、とても叶はないさ』すると獅子は『だつてこの石像は、お前さんの仲間の人間が慥へたのも、若し僕等、獅子が石像を立てる仕方を知つて居るなら、言ふまでもない、獅子の前脚で押へ付けられた人間の様を見ることが出来るさ』。

其二十六 柘榴と林檎と荊棘

柘榴と林檎とが、何方が一番美しいといつて争つて居た。互に言ひ張つて、口論最中になつた時、隣りの生垣から、荊棘の花が、ひよいと顔を出して、さも自慢げな声で言ふには『まゝ、貴嬢がた、少くとも妾の居る所では、そんな無益な口論はお已(ママ)めなさいませな』

アンドロクルスと獅子

牧 羊

近頃動物虐待防止会といふ会の出来て居ることは皆さん既に御存じでせう。この会は、人間が、自分よりも下な弱い動物を苛めるのは、いけないなるべく大事にしてやらなければならぬといふのでつまり動物を可愛がつてやることを、世間一般の人に奨励するのであります。

動物だつて、つらな事も悲しい事も知つて居れば嬉しい事も楽しい事も知つて居ます。夫を無暗に苛めるのは、まことに彼等にとつて可愛相な仕業でありませんか、殊更、動物の中でも、恩に感じて其恩に報ゆることなどもよく知つて居るのが沢山あります。犬とか、馬とか、猫とか、牛とかの恩に感じたお話は、古からの本に沢山出て居ませう。して見ると動物だつて決して無闇に苛めてはなりません。

彼の獅子といふ獸は、皆さん御承知の通り、勇猛無類で、獸の王とまでいわれるのであります。其獅子に就いて、古くから伝はつて居る面白いお話があります。

むかし／＼阿弗利加の北の岸の所に、カルセージといふ国がありました。其くに、アンドロクルスといふ一人の奴隷が居りました。毎日々々、主人にこき使はれて、ひどい目に計り遭ひます。でも／＼辛抱しきれなくなつて、或日のことと――

／＼主人の家を逃げ出しました。さて、だん／＼其市街を逃げて、走り出しましたが、或山道にかつた時は、日も暮れるし、腹も空くし、足も痛くなるし、も一足も歩けませんから、其処いらの大きな洞穴の中へ這入つて、横になつた儘、ぐすり寝こんで仕舞ひました。暫く

経つと、入口の方で、何か知らん、大変な咆（う）り声（こゑ）がするので、吃驚（びっくり）して目を醒（さ）まして、走り出て見た所が、穴の入口の所に、大きな大きな一匹の獅子が、つつ立（た）つて居りました。

こゝなつて見ると、もう逃げるにも逃げられない／＼たゞ一口に噛み殺されるより外はないと思つて居た所が、不思議にも、其獅子は、音（おと）なしにアンドロクルスの方へ近づいて来る、別に恐ろしい顔（かほ）附（つ）きしないで。そして、何だか哀（あは）れつばい、低い声を出して、しきりに何か助けて欲しい様な風をする。だん／＼側に近づいて来た所で、よく／＼見ると、一本の足を跛（びこ）ひいて居る、どうも怪我（けが）でもしたのでありませうか、少し腫（は）れて居る様な風だ／＼「ハ、これだな」と分つたので、早速獅子の側へ倚（よ）つて、丁度医者が病人を診る様な具合に、其足を取つて見た所が、跛（びこ）もひく道理、其足の裏には、大きな太い棘（いばら）がたつて居ました。そこで、すぐ其棘（いばら）を引き抜いて、ハンケチを引きさいて、傷をしつかりいはてやつた所が、痛みがすぐ直つたらしい。所が、此時の獅子の喜（よろこ）びといつたら、大変なもので、丁度遊び盛りの小犬の様に、大きな尾を振つて、アンドロクルスのぐるりを飛び回るやら、手を甜（な）めるやら足を甜（な）めるやら、出来る限りの厚意（こうい）を顕（あら）わしました。さて其時から、アンドロクルスは、丸て獅子の大事なお客さんになりました。獅子は毎日出かけて行つては、獸（けもの）などを取つて来て、夫（それ）をアンドロクルスに分けて食べさせます。

こんな風に、アンドロクルスは、彼（かれ）れ是（こ）れ二月余も獅子と一所に暮（くら）して居ましたが、或時、何の氣（き）なしに、一人で山を散歩して居た所を、とど／＼追手に捕（つか）まつて、又元の主人の所へ引張（ひ）つて行（い）けました。

所が、此時分の法律では、一旦逃げ出した奴隷（どれい）が捕（つか）まつた時は、獅子に喰（く）ひ殺（ころ）せるといふ刑罰（けいばつ）なのです。其（その）為（ため）に大きな觀（み）世（ぜ）物場（ぶつば）が出来て居つて、大勢（おほぜい）の人が集（あつ）つて人間（にんげん）が獅子に喰（く）ひ殺（ころ）されるのを見物（けんぶつ）に行くのです。

そこで、アンドロクルスも、だん／＼調（しら）べられた末矢張り、此刑罰（けいばつ）を受けることになりました。もうどうしたつて仕方がないと諦（あきら）めましたから、柔順（おとなし）く觀（み）世（ぜ）物場の真（ま）中に引張（ひ）り出（だ）されて、從容（じやうよう）として、定（さ）まつた運命（うんめい）を待つて居ります。大勢（おほぜい）の市民（しゐん）は、周囲（しうゐ）の棧敷（さきず）に座（す）つて、この悲惨（ひげん）な演劇（えんげき）を見物（けんぶつ）して居ます。暫（しば）くすると、片一方（かたいつぱう）の隅（すみ）から、恐（おそ）ろしい咆（う）り声（こゑ）が聞（き）こえた。見物（けんぶつ）人は一時に震（ふる）へ上（あ）つた。見ると大きな獅子が、狂（くる）り狂（くる）り飛（と）び出したのである。燃（も）ゆる様な眼（め）は火（ひ）の様に輝（かがや）いて、口（くち）は耳（みみ）までも劈（ひ）けて居る。いきなり真（ま）中の餌食（えしき）に飛（と）びかゝつた。見物（けんぶつ）人（ひと）一同（いどう）は、先（ま）づ胆（い）を冷（ひや）やした。然（しか）し其（その）次（ぎ）の瞬（しゆん）間（かん）に於（お）ける見物（けんぶつ）人の驚（おどろ）きは、又（また）大（おほ）したものだつた。一思（ひと）ひに飛（と）びかゝつて喰（く）ひ殺（ころ）すだらうと思（おも）つた其（その）獅子（しし）が、打（う）つて變（かは）つて音（おと）なしになつて、丸（まる）て飼（か）い犬（いぬ）が主（しゆ）人に甘（あま）つたれる様な調子（てうし）で、アンドロクルスに纏（まと）き付（く）いて居る。

余（あま）りの不思議（ふしぎ）に、これには何（なに）か所以（わけ）があるだらうといふので、役人（やくにん）どもはよつて集（た）つて、其（その）訳（わけ）を話（はな）させた。そこで、アンドロクルスは、何時（いつ）か山（やま）の中で獅子（しし）を助（たす）けた話（はな）をして、其（その）助（たす）けた獅子（しし）といふのは、はからずも茲（こゝ）に立（た）つて居るこの獅子（しし）だつたといふことを演説（えんぜつ）しました。

大勢（おほぜい）の見物（けんぶつ）人は此（この）話（はなし）を聞（き）いて、非常（ひじやう）に感動（かんどう）しました。そこで、アンドロクルスを放免（はなめん）してやることを役人（やくにん）に願（ねが）ひました所が、役人（やくにん）も尤（もつとも）だと思（おも）つて、とど／＼彼（かれ）を宥（ゆる）して、おまけに、此

忠実な獅子をも与へたといふ事であります。

第三卷第八号（明治三十六年八月）

いそつぶ物語

其二十七 農夫と鶴

農夫が、畑を造つて種をまくと、いつでも大勢の鶴がかたまつてやつてきて、畑を荒らして行きますから、或日網を張つて一度に、沢山な鶴をいけどりしました、所が其中に一羽の鶴が居て、一本の脚を網で折られてつかまりましたが、一生懸命に命乞をします。

『御主人様、どうか助けて下さい、此通り私の脚は一本折れて居ます、可愛相じやありませんか、おまけに私は鶴じやありません、鶴と申して、実は性質の立派な鳥です、卿、私がどれ程両親に孝行だかといふことも御存じでせう。虚とお思ひなら、一寸私の羽をごらん下さい。鶴などは大変な違じやありませんか』

そうすると、農夫は大きな口を開いて笑ひ出しました。

『なる程、お前のいふのは皆尤もな話だ、然し已うはそんなことは知らない、たゞ鶴といふ盗人どもと一所にお前をいけどつたのだから、お前を鶴と一所に殺す丈のことだ』
といつてとう／＼殺して仕舞ひました、「羽のある鳥は何時も一所に群れて居ます」

其二十八 山から鼠

何時でしたか、どこかの山が大変に荒れ出して、あちこちに其響き声が聞こえたので、何事かと思つて大勢の人々が方々から集つて来て、誰も彼も心配さうな顔附で、何れ大変な

災害でもある事だと待ちかまへて居ると、豈計らんや、一匹の鼠が這ひ出して来ましたとぞ。

『何でもない事に大騒ぎをするものでない』

其二十九 熊と狐

ある時熊が、自分が大変な仁者だといつて自慢しました『何だつて、一切の獣類の中で、人間に取つては、乃公ほどやさしい者はない、乃公は死んだ人間にさへ口を触れないからなあ』すると狐が側で、聞いて居て、に／＼しながら熊に申しますには、『ハ、一休ならば、生きた人間を食はないで死んだのを食ふといふのだ』

其三十 亀と鷺

或時、一匹の亀が『さもたる相に脊中を日にほしながら、水鳥に向つて、誰も己に飛び方を教へてくれる人がないと言つて、大変に自分の不幸な境遇をこぼしました。すると一羽の鷺が側によつて来て、つく／＼と亀の悲を聞いて居ましたが、やがて、若し亀をつかんで行つて、高く空中を飛び廻はつてやつたら、褒美に何を呉れるかと聞きました。そこで亀が申しますには、『そうして呉れれば、僕は海の中の一切の財産を上げる』すると鷺は、『じや、僕が飛び方を教へてやる』といつて、すぐ、爪にひつかけて、大方雲の中までも飛んで行きましたが、やがていきなり爪を離すと可愛相に亀は、高い峻い山の上に落ちて、甲も何もぐた／＼に碎けました、死ぬる間際になつて、亀は次の様に申しました、『嗚呼、僕がこんな目に遭ふのは当然だ、一休地面の上で、やつと歩き廻はるこの出来る僕の身に取つて、羽だの雲だのがあつた所でどうなるもんか』
『もし人間も、自分の望みを皆遂げると、屢々、滅亡しなければ』

「ばなるまい」

第三卷第九号（明治三十六年九月）

いそづぶ物語

其卅一 狐と山羊

一匹の狐が、深い井の中に落ち込んで、上ることができないで難儀して居る処へ喉が渴いた／＼といひながら、一匹の山羊がやつて来て、ひよいと、其井の中をのぞき込んで見て、狐に井の水が、いか、どうかと尋ねました。狐は、自分の辛い事は隠して態と愉快相に、水は余程奇麗だし、冷たいから、すぐ下りて来て飲んで見玉へ、と下からいひました。山羊は、も一水飲みたい一方、他の事は考へる暇なしに、すぐ飛び込んで、先づ一口飲んで見た。そこで狐は、始めて、此井から上ることの難しいといふことを話して、さて申しますには、『そこで、どうかして、吾々はお互に助け合つて上らねばならん。だから、まづ、君は両足を、此井の壁にもたせかけて、頭を下向けにし給へな。僕は、君の脊中を台にして、上に飛び出るから、其後で、又君を助け出すことにしよう。』仕方なしに、狐のいふ通りになると、狐は、早速山羊の脊中から、角に足をかけて、ぴよいと、井の外に出て、それなり、行かうとしますから、山羊は、『夫では約束が違ふじやないか』といつて、狐を責める、すると狐は、ふり返つて『君も、余つ程馬鹿だなー、一体君が、其顎の鬚ほども頭に脳髓を持つて居るなら、上り道を知らないで下りて来るといふことはあるまい。逃げ道の工夫をしないで置いて、危険い所へ這入るなんて、そんな馬鹿なことがあるもんか』

這入ル前二、ヨク氣ヲ付ケヨ

其卅二 鳥と白鳥

あるとき、鳥が、白鳥の羽毛のいかにも奇麗なのを見て、どうにかして、自分もあの通り奇麗にしたいものだとか考へた末、一体、白鳥は、毎日／＼水につかつて、洗つて居るので、夫であんなに美しくなつたのだから、自分も、其通りやつて見ようと、考へ付いて、どう／＼葉から飛び下りて、川の中へ宿代をしました。そこで、毎日毎晩、水で洗つて居たけれども、いつまでたつても、黒い羽毛が白くならない、其中に、食物がなくなつて、おしまひに、死んでしまひましたとき。

天性ハ習慣ニヨツテ代ヘルコトガ出来ナイ

其卅三 渴した鳩

一羽の鳩がありました。非常に喉が渴いて居た時に、看板の画にある、盆に水の入つてゐるのを見て、絵だとは知らないで、いきなり、夫を目かけて、烈しく飛んで行つたので、イヤといふ程板へ身体をぶつ付けて、其ために、羽を挫いて、地面に落つちて、とう／＼通りかゝりの人に捕まりましたとき。

思慮ニ過ギテ狂熱ニ走ツテハ不可ナイ

第三卷第一〇号（明治三十六年一〇月）

いそづぶ物語

其三十四 犬と牡牛

一匹の犬が、まぐさ桶の中に這入て居て、牡牛どもが其中のかれ草を食べに来ますと、しきりに齒をむき出して、吼へたりうなつたりして邪魔をします。すると一匹の牡牛が、連の牛に申しますには『マー何だつて此犬は欲張りじやないか、自分でかれ

草をよう食べない癖に、他が食べに行かうとすると邪魔するのだから!!

其三十五 牡牛と車の軸

牡牛が重い車を引いて、田舎道をやって行きますと余り重いので、車の軸が辛棒しかねて、恐ろしくなり響いて叫びます。そこで牛は後向いて

『オヤ、なぜ君はそんな大きな音をさせるのだ、一体こんなに骨折てるのは、君でなくって僕だよ、だから、君よりか僕の方が叫び出すのが本当じやないか、一番多く苦シム者ハ一番少ク叫ブ』

其三十六

一匹の獅子が年老つて、もうとても力づくで獲物を取つて食べることが出来ませんから、一番計略をやつて見ようと考へました。夫で毎日、洞穴へ引つ込んで病気で寝て居る風をして、なるべく大きくように世間へ知れる様にして居ますと、獣どもは、夫を聞いて見舞にやつて来ました。すると其獣どもを、一匹づつ片端から食べて仕舞ひます。こんな具合に沢山の獣が食べられてから、狐がひよつと其計略を見附けました。夫で或日見舞にやつて来ましたが、決して洞穴の中には這入らないで、外に立つて丁寧に見舞の言葉をのべて居ます。すると獅子は中から『私はこんなに病氣なのに、お前さんなぜそんなに外に立つて居るんです、まあ這入つて来て一寸見て下さい』と言ひますと、狐は『や、ありがたがまゝ、止しませうよ、貴下所の穴には、這入つて行つた足跡が沢山あるのに、帰つて来た跡は一つもないじありませんか、他人ノ不運ヲ見テ自ラ戒メル人ハ賢コイ』

第三卷第一一〇号（明治三六年十一月）（見出しには訳者を「記者」とする）

いそぶ物語

其卅七 熊と二人の友人

二人の友達が、山中を連れて通つて居ると、忽ち大きな熊が道の真中に頭はれて来ました。すると一人は、いまなりと側の木の上にかき上つて、枝に隠れました。もう一人は、とても逃げられぬと知つたので、すぐ地面へ打ち倒れて、息をはずませて静にして死人の様に、ぢつとして居ました。熊は側まで来て、此人の息を嗅いで見て、死人たと思つて、食べようともしないで、どこかへ行つてしまいました。死肉を食はないのが熊のくせだそうです。さて熊の姿が全く見えなくなつた所で、一人は木から下りて来て、戯れに、問ひました。『熊は君に何といつて耳語て居たかね』

すると 友達はこう答へました。

『さうさ、熊は僕にこういつたよ、危い目に遭つた時、其友を見捨てる様な人とは、必らず一所に連れ立つものでない』

不運は友情の試金石なり

其卅八 尾を失した狐

一匹の狐が、陥穽にかゝつて逃げた事は、逃げたが、其代り尻尾を取られた、どうも自分ばかり、尾なしに居るのは、何だか見つともないし、可笑なものだ、といろ／＼苦心して考へた後で、よしよし、夫では皆の狐共に尾を切らせよう、すれば誰も彼も尾なしになるから、己一人笑はれる氣遣なしだと思案して、或日のこと、沢山な狐を、よび集めて、皆に尾を切つて

仕舞ふことを忠告しました。『どうも、尾がない方が、形が見
よい様だし其に第一、あのふさ／＼した尾の重さがなくなる／
これは、全く余計なものだからなあ』など、いつて居ると、一匹
の狐が言ひますには、『然し、君が自分で尾を無しさへせね
ば、僕等に其んな相談はしないのです！』

其卅九 獅子の恋

一匹の獅子が、樵夫の娘をお嫁にくれといつて来ました。お父
つあんは、無論獅子などに娘をやりたくはありません、が、夫
かといつて、やらないと言ふのも恐いし、どうしたらいいかと考
へて、やう／＼其計略を見つけました。先づ獅子に、たつた一つ
此方の言ふ事を聞いてくれれば、喜んで娘の婿さんにしませ
うといひました、其一つといふのは、娘は、獅子の歯と爪とが
大嫌ひだといふから、どうか、其あなたの歯と爪とを取つて、し
まつて下さいといったのです、そこで獅子は、自分の好きなお嫁
さんが貰へることだと思つて、なほに此位の事ならといつて、
早速其歯と爪とを切つて仕舞つて、さて、約束通りにしたから、
娘を下さいと申し出た所が、今度は樵夫は、もう恐くはあり
ませんから、いきなり太い棒を持つて来て森の方へ逐つ払つてや
りましたとさ。

第三卷第一二号（明治三六年一二月）（見出しには訳者
を「記者」とする）

いそつぶ物語

其四十 各番者
各番者が、沢山お金を溜め込んで、何でも人の見ない所に置
きたいと思つて、裏の壁に穴をあけて其中に入れて置いて、毎日

／＼のぞいて見ては、案にして居りました。
所が、一人の悪漢が、毎日壁の穴をのぞいて居るのを見つ
て、一体何してるのだらうと思つて、其各番者の知らぬ間に、其
穴の中を探して見て、どう／＼沢山なお金を見出して、すつか
り夫を盗んで行きました。

次の日に各番者が来て、のぞいて見ると、金が一文もないので、さ
あ大変だといつて、大騒ぎをして探しにかゝりました。すると、隣
りの人が来て、其訳を聞いて見て夫から言ひますのは
『さう夫なら別にそう騒ぐにも及ばんじやないか、そこいらの石
塊を持つてきて、お金の代りに入れて置いて、夫をお金じやと
思つて居ればいゝじやないか、金が此処にあつた時だつて、使はな
かつたのだから、石を入れたいも同じじやないか』

※このあたり、ルビがずれている。

其四十一 仔家と羊と山羊

一匹の仔家が、羊だの山羊だのと、一所に小屋に入れられま
した。所が或時に、番人がやつて来て其仔家を捕へますと、さ
あ、仔家が泣く、騒ぐ、暴れる、いかにも騒々しいので、羊と
山羊とが側から『君、僕等も、時々彼の人に捕まるよ、然し僕
等は一度もそんなに、益しく騒いだ事はないよ』といふと、仔
家は答へて『だつて、君方の捕へ様と僕のとでは、訳が違ふのだも
の、君等の捕るのは、たゞ、毛だの乳だの、為だらう、所が僕を
捕へるのは、命を取る為だもの！』

其四十二 自慢する人

或人が、方々の国々を歩いて、自分の国へ返つて来てから、大法
螺を吹いて自慢をしました。其自慢話の中に、こういふこと
をいひました。『私は印度に行つて滞在つて居つた時、飛行術

をやつて、印度人を吃驚させた。機械もなしに飛んだのだから、えらいだらう。嘘と思ふなら、見た人がいくらかもあるのだから、証人として、呼んで来てほしいさ』すると、側で聴いて居た一人が言ふには『君、其話が真実なら、何も態々証人を呼ぶには及ばん此処を印度だと思つて、一番飛んで見せてくれ、ばいいじゃないか』(マ)

其四十三 子供と金米糖

子供が金米糖の這入つた瓶の中へ手をつき込んで出来る丈け沢山握んで、さて手を出さうとした所が、瓶の首の所でつかへて、どうしても出ることが出来ぬ。金米糖さへ、離せば出来るに決つて居るけれども、夫はいやだし、夫かといつて、手を抜く事も出来ず、困つて／＼／＼泣き出しました。

お祖母さんは、泣き声をき／＼つけて、何事だかと思つて来て見ますと、こうでせう。そこで静かに言て聞かせました。

『坊や、お前、手に持つて居る半分丈けでよいとしないさい、すると、手を引き出す事が出来ようから』

一度に余り多くを企てるな

第四卷第一号(明治三十七年一月)

いそつぶ物語

其四十四 子供と狼

羊の番をして居る子供が、何時も、狼だ／＼と呼び廻はつては、吃驚して出て来る村人等を見て、指さして、嘲笑つて居りました。所が、或日の夕方、真個に狼がやつて来たので、これは、大変だと思つて、大声を上げて、『狼が来た誰か来てくれ／＼』といつて、走り廻りましたが、村人らは又

彼の小僧めが悪戯をして居るといつて、誰も出てきてくれません。夫で、狼は、思ふ存分に羊を捕つて食つて帰りましたとさ。真実のことをいつても、嘘吐きの言ふことだと、誰も信じません。

其四十五 子供と蛙

子供らが、よつてたかつて、池の端で遊んで居ると、蛙どもが、時々水の上に頭を出して来る、夫を面白がつて石を投げつけては殺して居ますと、どうとう、其中の一匹が、頭を出して来て言ひますには『子供さん、お願いだから、どうか、止して下さいな、あなた方は、夫で面白いでせうが、私共は、一匹づゝ死んで行くのですよ』

第四卷第二号(明治三十七年二月)

いそつぶ物語

其四十六 蛇と人

一匹の毒蛇が、人の家の廊下の下に穴を作つて住んで居ましたが、ある時其穴から、出て来て、其家の子供を噛み殺しました。両親は、大層悲みましたが、お父さんは、よし／＼夫では一つ敵討に、彼の毒蛇を殺して仕舞はうと考へまして次の日、蛇が食物を求めに、穴から出ようとする処を待ち受けて、大きな手斧を以て、たゞ一討にしてやらうと構へましたが、残念なことには、あまり狼狽のために、蛇の首を斬りおとすことが出来なで、やつと尾の端を一寸斬り落とした丈けで逃がしてやりました。夫からと云ふものは、お父あんなは、毒蛇が又自分をも噛みに来るのではないかと思つて、急に、恐くなつて来ましたが、どう／＼蛇と仲直りをしようと思つて、少し許り御飯と塩

とを持つて行つて、其穴の口によつて置きました、すると、彼の蛇は、二一つと、穴から首を出して来て申しまするには、

「ねー、お前さん我とは決して仲直りするとは出来ないじやないか、なぜかといふに、已マははお前さんを見る度に、已マの尾を斬り落された事を思ひ出すし、お前さんは又、已マを見る毎に、息子の事を思ひ出すからだ」
害を与へた人の前で、其害を忘るゝ事は難い

其四十七 牡牛と屠牛者

ある時牡牛どもが、集つて会議をしました。そうして「どうも、彼の屠牛者といふ奴は、常に吾々を殺しに来る憎い奴だから、今度は、此方から彼等を亡ぼさうではないか」といふ事を相談しました、そして、愈々其計画を実行するといふ事に決めて、各自二つの角をときすまして居ますと、其中で、一番年とつた牡牛が、皆に申しますには、

「なる程、屠牛人が吾等を殺すには違ないが、然し夫にしても中々上手にやつてくれて、決して無駄な苦を吾等につけないと思ふ、今若し吾々が、彼等を亡ぼして仕舞ふといふと、彼等から殺されることは免れるにしても、其代り今度吾々は、下手な人の手にかつて死なねばなるまい、何故かといふに、縦令、国中の屠牛者を残らず亡ぼして仕舞つた所が、人間といふ者は、其為に牛肉を食べることを已めないからなあ」
一害を以て他の害に代ふるは愚なり

其四十八 塩商人と驢馬

塩商人がある時、驢馬をつれて海浜に塩を買ひに行きました。所が、其帰り道に谷川があります。其谷川を渡る時に、此の驢馬は、態と足を履み滑らせて忽ち、河の真中でひっくり返

りました。そして起き上つて来た時には、塩は大方水で溶けて仕舞つて、其為に大に荷が軽くなりました、商人は、仕方なしに、元の所に引つ返して、も一度塩を積み直して、さて其谷川の処に来ますと、驢馬め、前と同じ目的で、以て又ひっくり返つて起き上る時に、荷物の重さを半分にして仕舞つてそして、丁度目的を遂げた様な風に、勇ましく、嘶いて居ます、そこで商人は、どうも其悪戯を考へつて、三度目に、同じ場所へ取つて返して、今度は、塩の代はりに、海綿を一杯、驢馬の脊中に積み込んで戻りかけました。さて、谷川まで来ますと、例の通り驢馬の奴さん、又ひよいと水の中にひっくり返りました、所が、今度は塩と違つて海綿と来たから堪らない、だん／＼水が浸み込んで重くなる許り、起き上つて見て、さすがの驢馬も、これには弱り入つて、閉口しましたとき、

其四十九 病気の鹿

一匹の鹿が病気で、森の隅の静な所に寝て居ますと、大勢仲間鹿が見舞に來ました、しかし見舞に來たはよいが、病気の鹿が、食べる為めに取つて置いた食べ物、皆で分けて食べて仕舞いました、それがために、此鹿はどう／＼死んで仕舞つた、病気の故ではない、食物がなくなつて、

悪友は利益よりも寧ろ害悪を持ち來ること多い

第四卷第四号 (明治三十七年四月)

いそつぷ物語

其五十 毒虫に刺された子供

子供が毒虫に刺されたといつて、大急ぎで、おつ母さんの所へ駆けつけて来て、『おつ母さん／＼私ね極そつと、捉んだのだけ

ど、こんなに甚く虫に刺されてよ」といつて痛さうに、指尖を見せるとおつ母さんは『そーよ、そーつと捉んだから、そんなに刺されたのさ、だから今度から、捉へるならしつかり捉へない、そしたら、決して刺されないから』

何でも、すべき事は、力一杯にする事です

(挿絵)

其五十一、天文学者

或所に、一人の天文学者がありまして、毎晩々々仰向いては、天の星を見て考へて居りました。或夜、何時もの通り、市街へ出て、一生懸命に、空の星を眺めながら、歩行て居る中に、間違つて深い井の中に落ち込んで仕舞ひました、先生吃驚仰天、面も手も足も瘡だらけになつて、大声を上げて、助けをよんだ所が、隣りの人が聞きつけて、駆け出して来てくれて、やつと助かつた。其処で、其人が、先生の井に落ち込んだ訳を聞いて云ひますには、

『オヤ、何といふ事です、先生は、天の事ばかりお考へなすつて、地の上に何があるかをお考へなさらなかつたのですか』

其五十二、牛と蛙と、

一匹の牡牛が、水溜りへ来て、水を飲んで居る中計らず、一匹の蛙の子を履み潰しました、其後、蛙のおつ母さんが戻つて来て、子供が一匹足りないといつて大騒ぎをして、兄弟の蛙に、どうした事かと尋ねました、すると、兄弟の蛙どもは、口を揃へて、『可愛相に死んだのよ、おつ母さん、たつた今の前ね、四本足を持つた、大きな、動物がやつて来てね、あの割れた蹄で押し潰して置いて、行つたの』といひますと、おつ母さんは、いきなり、力一杯に、自分の身体を膨張かせなが

ら、『では、其動物といふのは、これ程も大きかつたの』と問ひますから、子蛙は吃驚して、『あら、おつ母さんつてば、そんなに膨張らかすのは廃して頂戴よ、そして、もう怒らないで下さいな、何故つて、おつ母さんは、あの動物の大きさを真似ようとしたつて、反つて自分で破裂けて仕舞ふですもの』

其五十三、小山羊と狼

小山羊が、屋根の上に登つて、こゝなら大丈夫安心だと澄み込んで折ふし其下を通る狼を見て、切に悪口を吐いて嘲弄します。すると狼は夫を見上げて『馬鹿め覚えて居ろい、併し、實際乃公を軽侮して居るのは、貴様でなくつて、貴様の立つて居る其屋根なのだ』

時と場所とは、屢々強者に対する弱者に利益を与へることがあります。

其五十四、お老婆さんとお医者

年取つたお老婆さんが、眼が見えなくなつたのでお医者さんと呼んで治療を頼みました。そして、こう云ふ約束をしました。若し、お医者さんが、眼を元の通り見える様にして下さるならば、お老婆さんから、幾らかの金を御礼する、併し直らなければ、一文も払はないといふ事なのです。そこで、お医者は、毎日／＼来て見ては、眼に薬を注して帰ります。但し、其度毎に、少しづつ、家の道具を盗んで行つて、とう／＼お老婆さんの持物を悉皆なくして仕舞ひました。さて、皆盗んで仕舞まつてから、お医者は、お老婆さんの眼を直して約束通りお金を下さいと申しました、所がお老婆さんは、眼が見える様になつてから、そこいらを見廻はすと、家中丸で空虚で、自分の持物が一つも在りませんから、お医者さんにもお礼をしません、併

し医者は貰はねばならぬと言ひ張るし、お老婆さんは私はな
いといふ、とう／＼裁判所へ持ち出しました。其処で、お老婆さ
んは、裁判官の前に立つて述べますには、

『なる程、お医者さんの申す事は嘘ではありません、私は確
に、私の眼が見える様になつたら、お金を払ふし、直らなけれ
ば払はないと云ふ事を約束しました。そこで、彼の方は、私が
眼が直つたと仰しやるのです、然し、反対に私は、まだ直らな
いと確信します、何故と申します、一体私の眼が見えなく
なつた時には、私の家の中には、価値のある品物などか沢山あ
つたのです、夫だのに今あの方は、確に直つたと仰しやるけれ
ども、私は家の中で、何一つ見る事が出来ません』

第四卷第五号（明治三十七年五月）

いそつぷ物語

（五十五）百姓の親子

一人の百姓が死際になりまして、どうか子供等にも自分と
同じ様に精出して畑を耕作やす様にさせたいものだと思へ
まして、さて、大勢の子供を枕元に呼びよせて次の様に咄しま
した。

『已ママは、お前方には誰にも知らさないで、家の畑の中へ、非
常な宝物を埋めて置いたから、お前方誰でも掘り出したも
のに、形見として上げよう』と云ふ言置きをして死にました。
其処で、子供等は、吾こそ其宝物を掘り出さうといつて、各
自、鋤や鍬を以て来て、丁寧に畑を、あちらこちらと掘り返し
て見ましたが、何一つ宝物らしいものが出ませんでした。然し
ながら、其お蔭で、其年の作物は非常な豊作でありました

とさ。

（五十六）鶏と鷲

二羽の雄鶏が、或日、畑で以て烈しく蹴合を始めました。そ
して、終に一羽の鶏が勝つて、一羽の鶏は小さくなつて、片隅へ
隠れました。そうすると、此勝利者は、高い垣根へ飛び上つて、
両方の羽をたいて、力一杯に勇ましく凱歌ひました。所へ
一羽の大鷲が、風を切つて舞ひ下つたと思ふと、忽ち此
勝利者を爪に引掛けて、再び虚空遙に飛び去りました。
傲慢の後には滅亡が来ます。

（五十七）狐と猿

或時、森の中で獸の集會がありました、其席上で猿が、
いろ／＼の芸当をして多勢の獸どもを喜ばせました所か
ら、とう／＼皆が、相談をして猿を獸仲間の王様にする事に
決めました。すると、狐が猿の名譽を嫉んで、或晩、係蹄に一
片の肉のかつて居るのを見付けて来て、そして猿に申しますに
は、『私は、今御馳走を見付けて来ましたが、先づ王様に上げ
たいと思ひまして食べずに置きましたから、どうか、一所に来て
食べて下さいまし』そこで、猿は『そうか、それはありがたい』とい
つて、其場所へ行き、何の気なしに食べようとして忽ち係蹄に
引つかつて仕舞ひましたから、非常に怒り出して、何故人を
欺かして、こんな目に遭はした、さあ承知しないといつて、狐に
食つてかりますと、狐は、片頬に微笑みながら、『オイ猿さん、
君は、そんな気で居て、吾々獸社会の王にならうなんて、ど
ても柄にないじゃないか』

（五十八）腹と手足等

或時、人間の手や足や目や口等が、腹に向つて不平を鳴らし

ました。一体、腹といふ奴は、怪しからぬ。日がな一日何もしないで遊んで居て、そして、一人で甘いものを食つて贅沢を極めて居る、吾々が、毎日働いて、彼の為に汗水になつて働いてやるのは如何にも馬鹿らしい話でないか」といふので、とう／＼皆が同盟罷工をやつて一切身体を助けないことに決めました。所が、忽ちにして全身、衰弱に陥つて仕舞ひました。そこで手や足や目や口等が、あゝ馬鹿なことをしたといつて、後悔しました。が、もう、後れました。

第四卷第六号（明治三十七年六月）

いそつぶ物語

（五十九） 親子の蟹

或時、蟹のお母さんが、子蟹に申しました。
「お前なぜ、そんなに、横々にお歩きなの？、真直に歩く方は、どれ程体裁がよいかも知れないよ」子蟹は答へますに
「お母さん、そりやそうよ、だから、お母さんが真直な道を教へてくれさへすれば、私だつて、チャンと其方に歩きますわ、お母さんは、これで全く閉口して仕舞ひました。口で言うよりも、お手本が大事です。」

（六十） 鼠と蛙と鷹と

いつも、地面の上で許り住んで居る鼠が、ひよつとした事から、大抵は水の中で暮す蛙とお仲よしになりました。所が、此蛙先生、中々、悪者でありまして、或日のこと、鼠の足と自分の足を、しっかりと紐で結びつけて、そして一所に遊ばうと言ひ出しました。

鼠は何の気なしに、蛙の言ふ通りにしました。二人は、足を

しばり合つたなり、あちらこちらと歩き回つて居ましたか、其中に、蛙は、だん／＼自分の住んで居るお池の方へ連れて行つて、其岸の所まで来た時、鼠をつれたなり、いきなり、ピヨ／＼とお池の中へとびこみました。そして、蛙はさも大したてがらをした様に、得意になつて、水の中をくぐつたり、クワツ／＼／＼と鳴いては遊び回つたりして居ますと、可愛相に、鼠は、遊ぶ事も何も出来ませんから、もう、疾づくに溺れて仕舞つて、其死骸が水の上に浮き上つて居りました。

前程から、大きな鷹が、お池の真上に舞うて居ましたが、鼠の死骸の浮いて居るのを見付けたとみえて、いきなり爪にひっかけて飛び上つて行きました。蛙は、やつぱり、足を鼠に結び付けて居ましたから一所に、鷹に取られたといふことです。

人をのろはゞ、穴二つといふ事がある。

（六十一） 馬と獅子

或時、馬が山へ行つて獅子と同盟して、沢山に獲物を捕獲する事に約束しました。獅子は、力で、馬は早く駈ける事で、互に助け合つて、利益を得ようといふ事に決めました。さて、思ふ存分に、沢山の獸を捕獲しました時に、獅子は夫を甘く分けようではないかと言ひ出して、三塊に分けました。其処で、獅子の申しますには、
「己は、獸の王だから、先づ第一の塊を取つて置くよ。そして、第二の塊は、お前と一所に働いた分け前として貰つて置くよ。夫から、第三の塊、だが之は、お前、喜んで己に呉れて置いて、早く家へ帰らないと、お前の為にならないのだ」といふて、皆取つてしまいました。

力即ち正といふことがあります。が、何とかいふ国は、今迄

よく此獅子の様な事をしましたつけ。

第四卷第七号（明治三十七年七月）

いそづぶの話

（六十二） 鼠の会議

いつも、猫奴が、密と来ては、鼠を捕獲するから何とかして猫の近くに来ることを知る工風がなからうかといふので、鼠どもが沢山寄つて、会議を開きました。いろ／＼の案が出ました中で、一番、これこそといふ名案は、猫の頸へ鈴を結び付けて置けば宜からうといふ建議でありました。なる程、それならば猫の歩くにつれて、鈴がなるから、其音で以て忽ち猫の来た事が知れるので、之は、頗る名案と、一同手を拍つて感心しました。所が、議長と見える一匹の鼠が、「然し猫に鈴を結び付けに行く者は、誰だ」と問うて見ると、行かうといふ者は一匹もなかった。

（挿絵）

（六十三） 猪と狐

猪が、或時、木の下に立つて、一生懸命に、其牙を木の幹へこすりつけて居ると、狐がやつて来て、獵夫も、犬も見えて居ないに、なぜそんなに牙を磨いて居るかと問ひました。猪は答へました。「今何も見えない中に磨いて置かんけりや、いざ鎌倉といふ時の間に合はぬじやないか」

《軍備は平和の確保なりといふ諺がある》

※「しようけんめい」の「よ」は転倒している。

（六十四） 年老つた獵犬

或所に一匹の獵犬が居りました。若い時は、獵に行つて、中々

他の獸を見逃す様な事はなかつたのでしたが、大分年老つてから、或時のこと、一匹の猪に出会ひました。夫と見るや、忽ち、飛びかゝつて行つて、耳へ食ひ付きましたが、悲しいことには、もう、すっかり齒が利かなくなつて居るから、すぐふり離されて逃がしてやりました。主人は此有様を見て、非常に失望して、いきなり、犬をなぐらうとしますと、犬は怨めし相に主人の顔を眺めて、「御主人様、猪を逃がしたのは、私の罪でありません、私の精神は、今迄通り、確なものです。併し、取る年には叶ひません、どうか、今の私をお叱り下さるよりは、以前の私をお褒め下さる事を願ひます。」と申しました。

（六十五） 二人の友と手斧

或時のこと、二人連れ立つて道を歩いて居りました。一人が、道に置いてある手斧を拾つて、「オー君、僕は、手斧を見付けたよ」といふと、相手は隙さず、「イーや君、『僕』がでない、『吾々』が見付けたと言ひ給へ」やがて、暫くすると、手斧の持主が、すた／＼と走つて追つかけて来たので、前に拾つた方が、真青になつて、「さあ、弱つた、吾々は取つかまるよ」とすると、相手は「なーに、君さつき君の言つた事を覚えて居給へ、其時、間違のない事なら、今でも間違ないだらう、『吾々』なんかいはないで、矢張『僕』といひ給へな」

（六十六） 樗樹と葦

大きな樗の木が、大風に出道つて、根から、引つき抜かれて、河のブツト向ふまで吹き飛ばされて、そこいらに生えて居る葦の中に落ちて、いふには「こりや奇態だ、こんなに軽くて弱々しい葦などがこの大風に、よく吹き潰されぬものだなあ、しますと、其葦どもが「そりやあなた、貴下は、此大風に抵抗して争ふ

からいけません、私等は、ごらんの通り、ちよつとの風にも、直き頭を下げます、だからこんなに助つて居ますのさ」と答へました。

第四卷第八号（明治三十七年八月）

いそづふの話

一羽の鷺が、高い崖の上に止つて、一匹の野兎を狙つて居りますと、獵夫が其後に隠れて居て、弓に矢を番つて鷺を射ると、狙違はず鷺の胸に当りました。鷺は射られたまゝ、不図其矢を見ると、矢の羽が、同じ自分の羽から出来て居るので、思はず次の様に叫び出しました。「己の羽で持らへた矢で、己の生命を取られるとは、よく／＼残念で堪らない」

旅順口で戦死したマカロフ丁督によく似て居るではありませんか

獅子と野猪

ある夏の暑い時、一匹の獅子と野猪とか、何方も喉が渴いて耐らないので、小さな井を見付けて、水を飲みに来ました。然し、誰が先きに飲むかといふことで議論が起つて、中々容易にきまらなう。どう／＼二人で烈しく立ち廻つて、噛み合を始めた。すると、上の方で、鷹が一羽飛び廻はつて居て、此喧嘩を見て居ます、そうして、どつちか一匹殺されたら、其肉の御馳走にありつかうとして待つて居ます。之を見て二人は、忽ち噛み合を廃めました。そして言ひますには「鳥や鷹の餌食になるよりは、いつそ、二人で仲直りをしようじゃないか」

馬と影

旅客が、道を歩いて居つて、余り疲れたからといふので、馬を雇つて乗つて行きました。所が、丁度此頃の様に暑い時でしたから、頭からお日さんに照りつけられて、とても耐らないといふので、どう／＼馬から下りて、其馬の影に座つて休まうとしました。然し、其影は狭いので、旅人が這入ると馬子が這入ることが出来ません、そこで、己が這入るのだ。いや己が這入るのだといつて、二人の間に議論が始まりました。つまり馬子は「こゝの影です、一體、馬を借りたいといつたから馬丈けを借したので、影までも一所に借しはしなかつた、だから、馬の影は、当然、こゝちが使ふ権利があるのだ、」すると、旅人は、「いや、元来影は当然馬に附いて居るものだ、だから、既に馬を借りた以上はどうしても、影を使用する権利は、己の方になくはならぬ、こんな具合に、議論をして居たが、どう／＼お仕舞には、議論に花が咲いてなぐり合になりました。其間に馬は、何処かへ駈けつて行つて仕舞ひました。

蟻と鳩

一匹の蟻が川岸へ行つて水を飲まうとして居た所を急に波のために、流されて、今にも溺れ様として居ました。すると、其川の上に、かぶさりかつた木の枝に、一羽の鳩が止つて居て、其鳩の溺れて居るまゝ側へ向つて、一枚の葉を落してやりました。蟻は、地獄で仏の思をして、やつとの事で其葉に這ひ上つて、無事に、川岸に漂着して、危い所を助かりました。夫から暫くして、此鳩が、或る木の枝に止つて居ると、一人の鳥さしが、竿の前にモチをつけて、下から、そつとささうとして居ると、彼の蟻は、夫と知つて、其鳥さしの足に思ひ食ひ付きました。夫から、鳥さしは吃驚して、竿を投げる、其拍子に鳩は飛んで行き

ました

第四卷第一〇号（明治三七年一〇月）

いそづぶの話

狐と豹

狐と豹と行き遭つて、何方が美しいかといふので甚く議論しました。処が、豹は、自分の皮について居るいろ／＼の斑紋を「一々狐に見せて、『どうだ奇麗だらう』といひますと、狐は澄し込んで、『然し、僕は身体にはそんな紋様がない代りに、チヤンと心に装飾がある、だから、君より、余程、美しいと思ふ』と、いひました。

獅子と兎

或時、兎が心地よく寝て居ると、大きな獅子がやつてきて、いきなり捕へて食べようとした。処がそこへ丁度、一匹の牡鹿がやつて来たので、獅子は、眠つて居る兎を捨て置いて、すぐ鹿を追つかけた。兎は其音に目を覚まして、『オー危いことだつた』といつて逃げて行きました。すると獅子は、どうしても、鹿に追ひつくことができなかったから、又元の処へもどつて、兎の御馳走にならうと思ひました。けども、兎はもう居りませなんだ。そこで、獅子は、『あ、これは不甘いことをした。余計に取らうと思つた許りに、己の手に入つて居たものまで逃がして仕舞つた』と申しました。

獅子と熊と狐

或時山の中で獅子と熊とが一匹の山羊を取り合ひして、激しく争つた末、二匹とも甚く怪餓をして、どう／＼其場へ倒れて動けない位になりました。すると、一匹の狐が遠くに居て、

さき程から、何度も行つたり来たりして見て居ましたが、二人とも、全く疲れて倒れたのを見極めて、いきなりやつて来て、中央になつた山羊を嚙へて走つて行きました。獅子と熊とは夫を見ながら、追つかけることも出来ませんで、『何んのこつた馬鹿／＼い／＼丸で狐に御馳走してやる為めに、二人で散々争うて、骨折つたやうなもんじやないか』といひました。よく、一人の人が骨折つたものを、丸で、他の人に取られて仕舞ふことがあるものです。

狐と農夫

いつもいつも、狐がやつて来ては飼つて居る鶏を捕つて行くので、或時のこと、どう／＼係蹄をかけて、其狐を生擒りました。そこで、余り悪いから、存分ひい目に遇せてやらうといふので、其尻尾に、薬を一束結び付け、夫に油をかけて、火を燃やしました。すると、狐は死者狂ひになつて駆け廻はつて、やがて、其農夫の裏の畑に飛び込みました。丁度其時は、麦の時分でしたから、堪りません、畑中一面火になつて仕舞つて、可愛相に、其年は、丸で、麦を取る事が出来ませんでしたとさ。

盗賊と鶏

或晩、二三人の盗賊が他の家へ這入りましたが、何も取るものがなくつて、たつた牡鶏一羽を盗んで行きました。さて、棲家へ帰つてから、夫を殺さうとしますと、其牡鶏が申しますには、『どうか、命丈は助けて下さい、私は、大層人間様の為めになる鳥です、即ち、夜分、仕事をさせる為に人間の目を覚させるので』すると、盗人等は、『夫だから尚更殺すのだ、なぜかといふと、お前が鳴いて家の人の目を覚まさせるといふと、全く己らの仕事が出来ないもの』といひました、善人の味方は屹度悪人

に憎まれます。

第四卷第一一号（明治三十七年一月）

いそそぶの話

腹ふくらした狐
狐が大層お腹を空かせて、山の中を歩いて居りましたが、大きな樫のウロの中に、誰が置いたものか、沢山な御馳走のあるのを見付けて、その中へ這入り込んで、腹一杯食べました、さて、出ようといふ時になると、お腹があんまり一杯になりすぎて、どうしても出られませんから、しきりに苦しがつて、鳴いて居りますと、そこへ連れの狐がやつて来て、よく／＼其訳を聞いて、申しますには、「夫れは仕方がない、あんまり食べ過ぎたのだ／＼だから、お腹が元の通り這入った時の様になるまで、そこで待つて居れば出られる」と言ひました
あんまり、たへすぎると、こんな目に遭ひます

獵夫と木樵り

一人の獵夫がありました、あんまり強くはない人でしたが、ある時、山の中で、獅子の足跡を探しながらやつて行きましたが、途て、木を伐つてゐる人に遭ひましたから、ひよつと、獅子の足跡を見なかつたか、夫とも獅子の棲家を知つて居ないかと尋ねました。木樵りは、「なーに、夫よか、獅子ならどこに居るか、すぐお前に見せて上げ様」と答へました。すると、獵夫は、忽ち真青になつてガタ／＼戦慄ひだして、「イーエ、ありがたう、私の聞いたのは、獅子の足跡です。獅子を探してゐるのではありませ

ん
真個に強い人は、言葉と同じ様に行ひが立派なものです。

兎と獵犬

野の中で、獵犬が一匹の兎を見付けて追つかけてましたが、とても叶はなかつた（ママ）ので、途中で止しました、すると小牛どもが、側で見て居て、「大きな姿して小さい兎に叶はないのは可笑しいな」といつて笑ひました。獵犬が言ふには、「そりやそうさ、僕は昼食がほしさに追つかけたのだのに、彼は、生命が欲しさに逃げたのだもの」

金の卵を生む鵄

或人が鵄を飼つて居ました所が、毎日金の卵を生みます、そこで其人の思ふにはこんな毎に金の卵を生むので見ると腹の中にはよつぽと沢山な金の塊が這入つて居るに違ないといつて一度に夫を取らうといふ考へから、どう／＼夫を殺して腹の中を見た所が、他の鵄と、少しも變つた事がなかつたので、夫からといふものは、一つも金の卵を取ることが出来なくなりましたとき。

獅子と狐と驢馬

或時、此三匹がお仲間になつて、餌食をとりに出かけました。随分沢山な獲物を取れたから、三匹で揃つて帰つて来まして、さて獅子が、此を三匹に分けようといつて、其分け方を驢馬に命じましたので、驢馬は、一々より分けて、同じ様に三に分けて、恭しく獅子に、どれでもおすきのを、さきにおとり下さいと申し上げました。すると獅子は、非常に怒つて、「この馬鹿め」といつて、たゞ一口に驢馬を食つてしまひました。其次に狐にも一度之をお前と己とに分け直せといひました。狐は畏れ、まづ三に分けたのを又一つにして其中から、極小さい一片だけを自分の分に残して置いて、其後を獅子の分としてさ

し出しました／獅子は夫を見て、「お前は仲々利口だ、其の方
方は誰から教はつた、余程甘いじゃないか」といひますと、狐は
「ハイ、たつた今しがた、驢馬の死んだのを見て夫から学びまし
た」と答へました。

人の不幸を見て、自分で用心する人は幸福です

第五巻第五号（明治三十八年五月）（見出しには訳者を「お
きな」とする）

いそづぶの話

人殺し

人殺をした人が、追手から追いかけて、ナイル河の岸まで
逃げて来ると、そこに一匹の獅子が居たので、これは耐らぬと、
木によち昇つた。すると、上の枝に大きな蛇が居たから、こりや
叶はぬと云ふので、いきなり下の河へ跳び込んだ。所が、河には
鰐が居て、たゞ一口にがぶりとのもんで仕舞つた。人殺をする様
な人は、地の上でも、空中でも、水の中でも助かりつこなしだ
といふ話

獅子と鷲

一羽の鷲が、どこからか逃げて来て、獅子に攻守同盟を申し
込んだ。すると、獅子のいふのが面白い。
「夫には我輩も反対はしないさ。然し、君が十分信用が出来
るかどうかを知りたいものだね。我輩は、自分の勝手な時には、
どんな約束もふりすて、飛んで仕舞ふ様な人を友達として
信用することが出来ないからね」

信用する前には試みよといふことがある、鷲といへば、今日本
と戦争して居る国の外交も思ひ出されます。獅子の言ふこと

は賢いじやありませんか。

真理と旅人

一人の旅人が砂漠を旅行して居て、一人の女に遇ひました、
旅人「あなたの名前は何かといふんですか」

女「私は、真理といふものです。」

旅人「あなたは何故、市街を出てたつた一人、こんな淋しい所に
居るのですか」

女「始め、虚偽といふものゝなかつた時は、私も市街に居りま
したが、今では市街一杯虚偽が広がつて来ましたから、私は
こへ出て参りました。」

獅子と狐

狐が、獅子の家に來になるといふ約束で、獅子の仲間に入
りました。そこで、各自の性質と力とに依つて適當した仕事を
受け持つて働くことになつた。狐が、餌を見つけて報告する
と、獅子が「一跳びに跳びかゝつて捕へるといふ風に。所が、狐
は、獅子がいつも餌をくわへては持つて行くのが、嫉ましく
なつて来て、今度からは、餌を見付けるはいやだ、自分で見付け
て自分で捕へることにしようと言ひ出した。そこで翌日、埒の中
に這入つて行つて、小羊を一匹盗み出して来ようとしたが、
忽ち、番人と犬とに見付かつて殺されましたとさ。

第五巻第六号（明治三十八年六月）

一羽の鳥が、咽喉が乾いて水をのみたくつてゐると、いゝ具合に
水の入つてゐる瓶を見付けました。さて其瓶から水を飲まうとし
ましたが、困つたことには、半分もないと見えて嘴が届かない。
そこで、一寸考へて、近くから、石を一つくわへてきては、瓶の

中にいれて居ますと、水がだん／＼上の方に上つてきて、どう／＼夫を飲むことができたとき

※無題だが目次には「鳥の智慧」とある。

ありとはと
向ふの木の枝に、鳩が一羽止つて居るのをみつけて、鳥さしが、長い竹の端に、もちを付けて、下からそ／＼とささうとしました。

すると、地面の上を這つて居た蟻が一匹、鳥さしの足の甲に這上つて来て、思ひ入り喰いついたので、鳥さしは、びつくりして、『あいたつ』といったなり、持つて居た竹の竿をおとしてしまひましたので、鳩も始めて気がついて、『あゝ危なかつた』といつて、高い枝へ飛び上りました。

夫から二三日たつて、この蟻が、水たまりの中に落ちて、あぶ／＼といつてなんぎして居ますと、上の木の枝に居た、以前の鳩がみつくて、『オヤ／＼かわいそうに』といつて、其木のはを一枚おとしてくれましたので、蟻はやつとこのはに、しがみついて助かりましたとき。

第五巻第一号（明治三十八年一月）

いそづぶの話

狐が鶴を困らせてやらうと思つて、ある晩、ごちそーをするからといつて、自分の家へ招びました。鶴はどんな御馳走か知らんと思つて、喜んで行きましたが、行つて見て、弱りました。甘し相なお汁を、平つたい皿にうすべつたく入れて、さあどうぞと狐が出て来たのですもの、鶴の長い嘴では、どうして夫が

吸へるのですか。
鶴は、大それた夫を残念に思つて、何でもこの敵討をしてやらうと思つて、夫から何日か経つて、狐を招びました。狐は、それとは知らずに何心なく行きました所が、今度は、口の細長い大きな瓶の中に、いろいろな御馳走を入れて、『さあお上り』といつて出されました。狐は食べようにも口が這入らない。鶴は、夫では私が一人で食べますといつて細長い嘴を瓶の口にさし入れて、一人でみんな食べてしまひましたとき。

第六巻第二号（明治三十九年二月）

金の手斧

むかし／＼、まづある処に、ごく／＼正直な、樵夫が居りましたとき、毎日／＼、山へ行つては、鉄の手斧でもつて、ちよん／＼と木を伐つて居りました。

ある日のこと、この樵夫、名前は正助といふのですが、いつもの山へ行つて、河の側で、ちよん／＼と木を伐つて居ました所が、ひよつと間ちがつて、其手斧を河の中へ落としてしまひました。

手斧は重いものですから、すぐ／＼と水の中へ沈んでしまひました。さあ、正助は、困りました。大事の大事の手斧をおとしてしまつて、もう、これから、木を伐つて働くこともできません。そうすると、家に居る年老つたお母さんや、小さい太郎さんや、お玉さんに御飯を食べさせて行くこともできません。ぬから、正助はさあ、どうしたら宜いかと、いろ／＼考へて見ましたが、どうにもする事が出来ませぬから、一人其処に座つ

て、泣いて居りました。

しますと、其河の中から、一人の美しいお姫様が、ぼーつと出て来て

「お前、何故泣いてるの？」

といつてくれましたから、正助は

「へい、たつた今大事の／＼手斧をこの河の底へおとしてしまひましたので、これから、木を伐ることができませぬから、家のお

母さんや、弟の太郎さんや、妹のお玉さんを養つて行くことが出来ないと思つて、どうしたもんだらうと、つらくつて／＼

しかたがないのです」

と言ひますと、お姫様は

「おや、そう？！じや泣くのはお廢し、私が今とつてきて上げるから」

といつて、見て居る中に、水の中へもぐつて行つて、ぴか／＼する金の手斧を取つて出て来て、

「お前の落したといふのは、これなの？」

といつて見せましたので、正助は

「いや、私のは、そんなに立派なんじやありませんね」

と答へますと、お姫様は、又ざぶつと這入つて行つて、今度は真白な銀の手斧をもつて出て来て、

「ではお前の落したといふのは、これ？」

といつて見せますと、正助は又

「私のは鉄のです、そんな立派なんじやありませんね」

そこで、今度は、お姫様が這入つて行つて、取り出して来たのは、

丁度、正助の落したといふ鉄の手斧でしたから、正助は、お姫様に大層御礼をいって、その手斧を貰ひました。すると、お

お姫様は

「お前は、中々正直だから、この金の手斧も、銀の手斧も、私から上げませう、これと売るとお金ができるから、それで、お母さんや、小さい子供たちを養つてさせることができませう」といふかと思ふと、綺麗なお姫様は、水の中へ消へて仕舞ひました。

それから、正助は、金と銀との手斧を売りに行きまして、大層なお金を儲けたもんですから、お母さんや子供たちに、美しい衣服や食物や、綺麗な御本などを沢山お土産に買つて参りましたとき。

しますと、この話を聞きつけたのが、隣の欲深老爺です。正助の奴、甘い事をした相な、よし／＼己も一番金の手斧を買つて来よう、と独り考へながら、ある日のこと、其川のふちへ行つて、自分の手斧を出して、ちよいと木を伐る真似をして、態と夫

を川の中へどぶんと落してしまつて、そしてわあ／＼大声を上げて泣いて居ました。

すると、其声を聞いて、美しいお姫様が、片手に金の手斧を持ちながら、水の中から、出て来て、

「お老爺さん／＼お前さんの落した手斧はこれなの？」

と見せました。お老爺は、「そらおいでなすつた」と思ひながら、いきなり

「はい、はい／＼それが、この老爺ので」

といつて、両手を伸ばして取りに行きますと、お姫様は、

「あら、そうじやないでせう、このお老爺さんは嘘ばつかし」!!!

と仰つたまんま、其金の手斧を持つて、また水の中へ這入つて仕舞ひました。

で、この欲張老爺さんは、金の手斧を貰へなかつた許りか自分の手斧までも失つてしまひましたとさ、

(挿絵)

めでたし／＼

第六卷第九号 (明治三十九年九月)

弥彦

欲ばつた罰
むかし或所に一人の大層欲の深い老爺がありました。この老爺さん欲の深いせに或日自分の虎の子のようにしていた七百元のお金を財布に入れたなりおつこととしてしまいました。

さあ大変老爺さんは青くなつたり赤くなつたりして探しまはりましたがどうしてもありません。そこで老爺さんはそこいら中に「もし私の財布を拾つて届けた人には百円お礼をする」と云ひふりました。すると二三日たつて正直そうなお婆さんがこの老爺さんの所へやつて参りまして。

「私が大層立派な。財布をひろひましたがもしや之れがあなた様では御座いませんか。」

と丁寧に一つの財布を懐から出して老爺さんに見せました。見ると自分のですから老爺さん「ヨ／＼して。」

「ハイどうも難有う。之れが私のです。」

と云ひましたが忽ち心中に例の欲深い心を起しましてどうかしてこの老婆さんに百円やらない工夫はないかしらという／＼考へました。

暫くして。

「たしかに財布は頂きました。唯今調べて見ました所七
百円御座いました。もと／＼之れには八百円入れてをきま

したのですから。ハア。ではもう御礼金の百円を先におとりになりましたのですね。」

と空とぼけて言ひました。なんと悪ひ老爺さんではありまんかマ。すると正直一方のお婆あさんは大層立腹しまして。

「どんなでもない。私は拾ふとすぐもつて参りましたので決して途中でなかのお金などには手もふれは致しません。」

とハッキリ言ひきりましたが、老爺さんは中々きません。

「それは。お前さんの業欲と云ふ物んだ。二百円お礼にとろうとは図太い。」

と云つて／＼裁判所へお婆さんをひつばつていきました。裁判官は二人の申し立てをよくお聞とりになつた上。

「サテ。双方の申立てにいつはりはないか。」

とお尋ねになると老爺さんは。

「ハイ／＼決して／＼まちがひは御座いせん。私の財布にはもと／＼八百円は入つてをりましたので御座います。」と申しました。

お老婆さんは又お老婆で口をとんがらかして。

「私はひろひましてからすぐこの老爺さんの宅にもつて上りましたので中のお金などには更に手もふれは致しません。」と申しました。

そこで賢明な裁判官はお婆さんが正直で可愛そうだとお察しになつたものですから。

「ソレデハお婆さんが拾つた七百元入の財布は老爺さんが落したのとは別物なのに違ひがないですからお婆さんお婆さんが拾つた財布の持主が出るまで大事にしまつてをきなさい。

それから老爺さん。あなたは自分の財布を誰が又拾つてくる

迄おまちなさい。」

と云ひ渡しましたあまり欲張つたので老爺さんは七百円まる／＼損をしまいましたとさ。めでたし／＼

第八卷第六号（明治四十一年六月）

猪と狐※

或日狐が山を散歩して居ると向ふの方で猪が頻りに牙を研いで居りましたので狐は不思議に思つて

狐「猪さん／＼君は何をして居るのだね？」

と聞きました。スルト猪はげんな顔して

猪「何するつて、御覧の通りさ、別段何んでもないさ。」と云ひま

すから狐は猶更不審に思つて

狐「夫れでもおかしいではないか、狐師も来ては居ないし、喧嘩

の合手も居ないのに、そんなにあはてないでも宜いぢやない

か、それより向ふの方へ行つて遊ばうよ！」

と云ひましたが猪は一向平気で

猪「狐師が来たり、喧嘩の合手が出て来てからは仕事が沢山

あるからね」と云つて居りました。

※目次には「猪と狐」の記載がない。

『万年艸』

第四卷（明治三十六年二月）

寓意譚

※目次では「荒木江村」とする。

（非イソップの三話省略）

江村※

孔雀の真似

或る高慢な鳥が、路傍に美しい孔雀の羽の落ち散つて居るのを拾ひまして、それを自分の体に挿して、これなら誰が視ても、本当の孔雀と見えると思ひまして、大胆にも、孔雀の群に入つて、一所に飛んで居ましたら、忽ち見付けられまして、大勢の孔雀に鋭い嘴で詐の飾をむしり取られ、其上に自分の羽までも、美しいのは、これも拾ひものだらうと云つて、むしられましたので、痛がつて泣いて帰りました。

（非イソップの二話省略）

驢馬

驢馬が仕事をするのが嫌で嫌でなりませんので、主人の家を逃げ出しました。其途中で獅子の皮の落ちて居るのを見て、これは好い物を拾つたと大喜びで、それを頭から被りまして、遠くから見ると本当の獅子かと見えるやうになりました。狐や狸や其外色々の獣はこれを見て、怖ろしがつて、自分たちの穴のなかへ逃げ込みました。そこで驢馬が大威張で考へますには、此上獅子の吼える声を真似たら、此辺の獣は一匹も居ないやうに皆逃るだらう、さうしたら安心して食物が捜されやうと、一声獅子の真似をして吼えました。其の聲が何だか変だから、今迄隠れて居た獣がみんな悟つて、出て来て笑ひました。さうして飼主に、驢馬の此処に逃げて来て居ることを知せましたから、主人は早速つかまへに來まして、鞭で散々になぐつて、家へ連れて帰りました。さうして逃げた前の倍くらゐ仕事をさせるやうにしました。

（非イソップの一話省略）

第五卷（明治三十六年四月）

寓意譚

江 村※

※目次では「荒木江村」とする。

奴隸と獅子と

或る所に奴隸が居りましたが、主人が余り非道く使ふから、苦しくてたまらずに、逃げ出しましたけれど、間もなくつかまりました。さうして逃げるやうなものは殺してしまへと云ふことで、垣を造つて、奴隸を其中に入れて、獅子に喰ひ殺させやうとしました。

獅子は垣の中へはいると怖ろしい声を出し牙を鳴らして奴隸に飛びかゝらうとしましたが、奴隸の側近くに來たら、俄かに気色を変へて尾をふり頭を垂れて、奴隸の手をなめたり体にすりよつたりして、何の害をも加へずに喜んで居りますから、大勢の見物人は、不思議に思ひまして、どうした訳だと、奴隸に尋ねました。

そこで奴隸が話しますには、私が主人の家を逃げて、荒野の洞穴の中に隠れて居ましたら、其処へ此獅子が泣きながらはいつて來ますから、見ると足に刺をさして居ますので、それを抜き取つてやりました。それから獅子は喜びまして、一所に仲好く穴の中に居りました。其中に探索人が來ましたので、互に分れ分れになつて、両方共捕へられましたが、いままた此処でめぐり逢ひましたと申しました。

見物人は此の話を聞きまして、獅子の恩を知て居るのと、奴隸の親切なのに、感心しまして、奴隸を免した上に、それに色々の物を贈りました。

其後奴隸は、獅子を連れて家を持ちました。獅子は犬のやうによく馴れて、奴隸の言ふことを聞くばかりでなく、外の人にも害を加へずに、皆に可哀がられました。

（非イソップの二話省略）

狐と鶏と

餓ゑた狐が村の方へ來まして、鶏に話しますには。

狐。お前のおとうさんは大層好い声だつたから、お前もきつと好い声だらう。どちらが好いか、一つ鳴いてお聞せ。

鶏は騙されるとは知らず、声をはりあげて鳴きました。そこで狐は急に飛びついて、鶏を咬へて、野の中へ逃げて行きました。

其音を聞いて、農夫が狐を叱りながら、追ひかけました。

鶏。狐さん。あの農夫の声をお聞きなさい。あなたを追駆けて來るのですよ。早く、此鶏はあなたのもので、人の鶏を取つたのではないと、お云ひなさい。さうすると追駆けませんから。

狐はなるほどと思ひまして、口から鶏を放して、其通りに申しました。其間に鶏は大急ぎで木の上に飛びあがりました。

鶏。やいやい、虚言つきの狐やあい。おれは百姓の家の鳥で、手前の鳥ではないぞ。

狐。このおしやべりめ。

鶏。お前の方がおしやべりだ。無駄口をきかずに居たらば、おれに逃げられはすまいに。

（非イソップの二話省略）

一 エソップ

エソップと云ふ人が、ある都会に用事があつて往きました時、後ろから旅人が來まして、エソップを見て、立ち止つて礼をしなから尋ねますには。

旅人。此処から見える彼都会まで、私が往き着くに、何時間か
ゝりますでせう。

エソオプ。お歩行きなさい。

旅人。歩行かなければ行けないことは存じて居りますけれど、
何時間であの都会に往き着くか、それをお尋ねするのです。

エソオプ。お歩行きなさい。

旅人は、此人は馬鹿だな、こんな人には物を尋ねない方が好い
と思つて、歩行き出しました。暫らくして、エソオプは旅人を呼
び返しまして、二時間掛かれれば往き着きますと、云ひました。
旅人は不思議な人だと思つて、振り返りながら。

旅人。なぜ先きにお尋ねしたとき答へないで、今になつて教へる
のです。

エソオプ。早足だか何だか見えない前に、何時間で向うへ往き着
けるか、答へられますか。

LAESOP※

※これは原文にある注。

『福音新報』

第四〇五号(明治三十六年四月二日)

群 鳩 (一)

冷 泉

(一) 北風と太陽
まづ或る處で北風と太陽とが落ち合ひました時に談話が
非常に跳むで、つい両者のうち何方が豪いかしらといふ議論に
なりました。

北「それは己か豪くなくつて」

太「いえ、私の方が豪いでさ」

と争論つたのですが、未だ何方とも決着は定きません、其処
へ丁度一人の旅人が通りかゝりました。北風はそれが眼につく
とボンと膝を打つて、

「豪氣！ね。いつまで経つたツて口では議論が乾かない。そ
らあそこに旅人かやつて来る、だふたなあの着てる上
衣の脱せこつさ。なんでも早く脱せた者か豪いと定る
んだ」。

太「え、成程甘い思付だね、では直ぐとかうらうか」
談話の終るか終らないに、尻がるの北風は最う寒い風を吹
かせはじめました。太陽は雲の上から見ると、

人「堪らんぞ、寒い風が吹いて来た。どつこい不注意すると
上衣を剥れて了ふは」

と云いながら旅人は上衣を両手で握りました。旅人は北風
が吹けば吹くほど上衣を、確と抑へるので、そのうちに北風は
根気まけをしてさび、「己にはとても駄目だ」といつて山陰に隠
れて了いました。

いまだ雲の上に控へてゐた太陽は此時雲の絶間から光線を
洩しはじめた。旅人はホツと呼吸をつき

人「有難い、太陽が輝つて来た」

暫時なく雲は残らず山のあちらに行つて了い、何処もどこ
も太陽の光線で暖たかくなつてまへりました。旅人は

人「熱い位だ。河岸で休息することとせう」

といつて先刻までの寒さに引かへ、暖いので、嬉しさうに腰を
河岸に下し、上衣を脱いで傍に置きました。

人「あ、好い心持だ、水で顔を一つ洗はうか……………」

さつきから模様が奈何であらうと、山陰から窺いてた北風は旅人が上衣を脱たのを見て、太陽にとうとう降参しましたとさ。

親切にすることはカづくですることより余程よく功ますよ。
(非イソップの二話省略)

(四) 松と無花果
まつ或る処に松と無花果が植ゑてゐました。してこの松はいつも冬になると無花果が葉のなくなるのを見て冷笑ふのでした。

処が或る冬の夕方のこと、雪が降るはふるは例年にない大雪で、殊に松は大層よわり、

松「斯う降られてはやりきれない。枝がベシ折て了ふは。あゝ重い――」

といひながら幹をふるひましたが、一向に雪は落ちません。それは其咎です。雪は繁茂つて松葉に積むで、夜の寒さに片端から結氷つてゆくのです。ですが無花果は葉がありませんから、少しばかり枝に積むだけでした。そのうちにホキリ／＼と数度音がきこえました。けれど夜中のことだから何が何んだか無花果には不明りませんでした。

さて夜が開けて見ますと、昨夜音がしたのは、雪が積むだ重みに堪へきれず、松の枝が折れたのでした。その後松は決して無花果が冬に葉を持たないからといつて冷笑ふやうなことはありませんでした。

(五) 獅子と野鼠
ある夏のことでした、大きい獅子が日中暑い頃、森の樹蔭に休息ふてゐましたが、つい眠気がさしてゴックリ／＼眠つて了ひ

ました。

その時近辺に遊ぶでゐた一匹の野鼠が、大きな巖と間違へて眠る獅子の顔をかけあがりました。安楽に眠つた獅子は顔が痒々するので眼を覚ましてみると、こんな始末ですから大層怒り出し、

獅子「なんだ、小さいくせに身分を忘れて獣類の王さんを馬鹿にするなんて。何のために眼は開いてる。過失だとは云はさないぞ、さあ一想ひに殺してやるから左様思

に話して、と咆哮り立てました。野鼠は過失つてした事ですから實際

鼠「以後きつと注意けます、此度だけは平に御許可を、また何れ御報恩も致しませう……」

獅子は全でき、終らぬうちにワハハと大笑いひをして「何が馬鹿な、あんな小さい野鼠の御報恩も聞いて呆れら」と思ひました。けれど實際に野鼠は悪意志があつて為たので無いことが腑に落ち、許可てやりました。

二三日たちまして獅子は土人の仕掛けた罠網にかゝりました。最うこの罠網にかゝつてはとも逃ることは六ヶ敷いのです。いやおうなしに土人に捕まらねばなりません。斯うなると体がいかに大きくつても意気志がないもの、ウン／＼咆哮りはじめました。それをあの野鼠がきこつて、

鼠「はてな、あれはこないだ私を許可して下さつた獅子さんの声によく似てるが……」

直ぐやつて来てみると的中くあの獅子が土人の仕掛けた罠網にかゝつて居るのでした。野鼠はこそ御恩のかへしどころと

思ひ、自分の鋭い歯で網を喰やぶり獅子を逃してやりまし
た。

これで小さい野鼠はあんな大きい獅子に報恩をすることが
出来ました。

由分社系『家庭雑誌』

第一号（明治三六年四月）

イソプ教訓談

（一）獅子と鼠

獅子が眠つて居ると、鼠が其顔の上を飛んで渡つたので、獅
子は忽ちに目をさまし、腹を立て、起きあがり、鼠を引捕へて
既に殺さうとした其時、鼠が哀れげに歎願するよう、「命だ
け御助け下さるならば必ず御恩は返します。」獅子は笑つ
て鼠を逃してやつた、それから間もない頃の事であつたが、其獅
子が獵人に捕へられて、荒縄でもつて其場にヒシと縛りつけら
れてしまつた。所が、彼の鼠、獅子のうなり声を聞きつけてやつ
て来て、其縄を噛みきつて獅子を放してやりながら、徐ろに云
ひだすよう、「あなたは私から恩返しを受けようなどとは思
ひがけもなさらず、私が何か御役に立つ時があらうと考へた
のを、嘸おかしい事におぼしめされたで御座いますし、鼠だ
とて獅子を助ける事もあると、今は御分りになつたで御座いま
しょう。」

（二）狼と小羊

狼が、牧場から迷ひ出た小羊に行きあつて、こいつは一番
手荒い事をせずに、小羊が得心して己れに食はれるような云
ひがりを仕てやりたいものだと思へて、「コラ／＼、其方は昨

年予に対してヒドク失礼な事を致したな」と云ひかけた。小羊
は悲しげな声をして、「アレマア、それはまだ私の生れぬ前で
御座います」と泣きだした。それで狼は又「其方は予の草原で
腹を肥やした事があらう」と云へば、「イヤ／＼どう致しまし
て、私はまだ草など食べた事が御座いませぬ」と小羊は云ふ。
狼又々、「では其方、予の井の水を飲んだであらう」と云へば、
「アレめつそうな、私はまだ水など飲んだ事が御座いませぬ。
飲むにも食べるにも、私にはまだ母の乳より外は無いので御座
いますものを」と云ひ聞く。そこで狼、小羊を引つかんで、「よし
／＼、たとひ其方いかように辯解いたさうとも、予は夕めし無
しには得居るまい」と云ひながら。とう／＼小羊を食つてしま
つた。

暴君は何とでも其暴行の口実を作る者である。

第二号（明治三六年五月二日）

イソプ教訓談

（三）狐と山羊

狐が深い泉に落ちて、どうしても逃げる道がなく、全く
擒になつて居ると、そこに山羊が喉を乾かしてヤツて来て、それ
は善い水かと狐に問うた。狐は其困つた身の上を押しかくし
て、実に何とも云はれぬ善い味だと、さも愉快げに水の事を誉
めちぎつて、山羊にも下りて来いと勧めた。山羊は水の飲みた
さに、何の考へもなく飛びこんだが、まだ其喉の乾きの止まる
か止まらぬかに、狐は逃げ道の無い事を山羊に話して、二人の
助かる方案を相談しかけた。狐曰く、「貴様が前足を比縁に
掛けて、頭を俯向けて居て呉れるなら、己れが貴様の脊中に

あがつて其れから外に飛びだして、そして跡から貴様を助けてやう。」山羊が又それを真に受けて承知したので、狐は其脊中にボイと乗つて、山羊の角を足がかりにして、首尾よく泉の口に這ひあがつて、其まゝサツサと行かうとした。山羊は怒つて、狐が約束に背くのを大変に罵つたが、其時狐は跡を振り向いて斯う云つた。「馬鹿め。貴様に其髭ほどの智慧があつたなら、上り道の無い処に飛びこんだり、逃げ道も知らぬ危い事に掛かりあつたりはせぬ筈だ。」

(四) 熊と狐

熊が慈悲心に富んで居る事を自慢して、総べての獣の中で、人間に対して一番やさしいのは自分で、自分は人間を尊敬するから其死骸にすら手を触れた事が無いと云ふと、狐が其れを聞いてニヤリとしながら熊に云ふよう、「さればさ、死んだのはヨシ食うても、貴公が生きたのを食はぬと善いけれどなア。」

『帝国文学』

第一〇号 (明治三十七年一月)

御伽噺三則

上田 万年

(非イソップの二話省略)

其三 人の口

ある日の夕方のこと、親子二人の百姓が小馬に荷車を引かせて、今日の耕作から、今其家へ帰へて行く処であります。親子も小馬も一日の働きで、みな大層疲れて居ます。そこで子供の云ひますには、お父さんは大分お疲れの様ですから、この車に

乗つて居らつしたら如何ですと云はれて、親爺はそれもさうだとうなづきながら其車に乗つて、子供が後からそれを推して行きました。そうすると向ふから二人づれの旅人が来ましたが其車と行き違ひに、其旅人の一人が、なんだ、いゝ年をして子供をあるかせながら、可愛そうに、と云ひながら通り過ぎました。親爺はこの話をかすかに聞いて、成程最もだと感心して、やがて車から飛んで下りて、こんだは自分の子を乗せて、自分の後から車を推して行きました。そうすると又向ふから二三人の若い人々がやつて来ましたが、その内の一人がこの車と行き違ひ様に、なんだ子供の癖に、親をあるかせてけしからん奴だ、と云ひながら通つて行きました。親爺はこの話を聞いて成程この話も最もだ、と思つてその子を下して空車を引かせて二人ながらあるいて行きました。さうすると今度は又向ふから一人の人が来ましたが此人はこの車と行き違ひ様に、なんだ、から車か、勿体ない、だれか乗つて行つたらよからうに、と云ひながら通り過ぎました。親爺はこの話を聞いて成程最もだ、それではこんだは二人一所に乗らうと云つて親子一所に乗つて参りました。処が又向ふから年とつた人がやつて来ましたが、此親子の車と行き違ひ様と、ヤレ／＼可愛さうに、小馬は一日畑で仕事をしたのだらうに、まだ人を乗せて歩るかなければならぬのか、乗る人も乗る人だ、ちつとはいははつて、使つてやつてもよさうなものだに、若し此小馬が死にでもしたらば、如何するだらう、と云ひながら行き過ぎました。親爺は此言葉を聞いて成程最もだ、これは小馬を休ませてやるのが、一番いゝと云つて、親子二人ながら車から飛び下りて、今度は小馬を車に乗せて、親爺が前を曳いて、子供が後を押して家へ帰つて行つたと申

します。

自分に考へを定める力がなく、たゞ／＼人の口によつてする人の仕事は、兎角こんなものでございます。

『をんな』

第四卷第一号（明治三十七年一月）

訓 御伽百譚

巖谷 小波聞
高階 柳蔭訳

家 鶏

或処に一人の老婆さんがありまして、兩人の下婢を使つてをりましたが、その老婆さんはなか／＼やかましい主婦で、毎朝家鶏が鳴きますと、それを合図に直と下婢を起して仕事にかゝらせますので、下婢等はそれを辛く思ひまして、或時兩人が相談しますには、

『何うも宅の主婦さんは朝早くから人を起して、やれ水を汲め、それ糸を續げと、働かせることばかりを考へてゐるが、一体あの家鶏が早くから鳴くのが悪いのだ。』と申しますと、一人の下婢が、

『さうだとも、あの鶏さへゐなけりや、主婦さんも目を覚さず、私等をも起さないのだ、寧ろ家鶏をこらしてゐれば、明朝から長く寐られて楽が出来るぢやないか。』

『才、それが良からう。』

と兩人で相談をして、そつと家鶏を殺してしまひました。ところが老婆さんはなか／＼油断がありません、次の日からは家鶏と云ふ時計がありませんから、自分が年老つて夜は早くから

目を覚ましてゐるので、もう夜が明けたらうと思つて今迄よりは尚更早く下婢を起しました。それも時によると夜半頃に時を間違へて起したりしましたので、下婢等は目的が外れて却つて家鶏のゐた時の方が良かつたと悔んでをりました。少しばかりの骨折を苦にして楽をしやうとしますと、却つて大きな苦を求めることになります。

第五卷第八号（明治三十八年八月）

訓 御伽百譚

巖谷 小波聞
高階 柳蔭訳

葡萄畑

ある処に一人の老人がありまして、永らく煩つてをりましたが、とても自分は助からぬと思ひましたから、ある日その三人の息子を枕元に呼びまして、

『予は今度はとても助からぬが、さてお前達も知つてゐるとほり、大した財産もないが、この家と後方の葡萄畑とはお前等三人に譲つてやるから、これからまず／＼仲よくして稼ぐがよい。それに予も死金として貯て置いた金があるが、それは葡萄畑に埋てあるのだで、それを掘り出して商売の資本にするがよい。』

息子等はこれを聞きまして、

『お父さん、何うか御安心下さい、これから兄弟は仲よくして精を出しますから、それからそのお金は畑の何の辺に埋てあるのです。』と尋ねますと、老人は苦しさうに、

『その金は……あの畑の……。』
『何の辺ですか。』

『……なかに……。』

と申しまして呼吸が絶えませんでした。それから息子等は泣く／＼跡片付けをしまして、幾日か日数が経ちますと、三人の兄弟は寄り合つていろ／＼相談をいたしました。何の辺に金があるのか判然分りませんから、詮方がなしにその翌日から三人で一懸生命を以て葡萄畑を掘り返して探しました。広い畑のことで沢山ある葡萄の根方を掘りましたが、金どころか十銭銀貨一つすら出ませんでした。ところで三人は落胆してゐましたが、畑は良く土を掘り返されたために、その年の葡萄の出来と云ふものは非常なもので、近い処に比ない位でした。そこで其葡萄を売したところが大そうなお金を儲けました。で兄弟は手を打って、

『あ、お父さんの死際に仰しやツたお金が埋てあると云ふのはこの事だなア、道理で幾許掘ツても知れなかつたが、そのために葡萄が此様に良く出来て、大そうなお金を儲けたのだ。』

と云ツて兄弟は喜びましたが、それからますます／＼精を出して畑を耕しましたので、年々良く実ツて次第に富貴になりました。

一 生懸命になつて働きさへすれば、必ず宝を掘り出すことが出来ます。

※「じやう」の「や」は転倒している。

『新古文林』

第一巻第一号（明治三十八年五月）

伊曾保物語

とろや山人

山の作物

昔、昔、大昔、山で大きな音がした。
噂に依れば山が何か持へるのだと云ふ。そこで近郷近在は元より遠国他国の老若男女手を引き連れて見物に出かけた。さて何が出来るであらうと云ふので甲論じ乙駁する。待遠しいの百万遍も繰返した頃に――山を飛び出たのは一疋の小鼠！

片目の鹿

昔片目の鹿があつた。いつも海辺で草を食ふ。何故かと云ふと、開いた方の眼は陸の方へ向けて獵人の用心をする、海から獵人の来る心配はないと云ふので此方へ閉がつた眼を向けて置くのだ。処が船頭が舟を漕いで来た、鹿を見ると海から狙つてハツシと射とめた。

心配と云ふ奴は来さうも無い処から来るものだよ。

坑 夫と漂布者

坑 夫、自分の家に明間があるので、漂布者に同居を勧める。すると漂布者『イヤ御親切は有難えが、まア御免蒙らうよ。何故ツて、私が代物を白くする側から御前はんに黒くされちやア堪らねえからネ。』

風と太陽

風の神と御日様と何方が強いと云ふので喧嘩をした。やがて、それでは何方でも旅の者の上衣を早く脱がした者が強いと云ふ事にしやうではないかと議論一決。

風は先づカ一ぱいにぶう／＼吹き始める、しかも恐ろしく冷たい身を切るやうなスレシア風と云ふ奴を吹く。けれども強く吹けば吹く程尚しツかり旅人は上衣を身に引きつけて世に離しさうにもせぬ。

やがてぬつとお日様が出る。心 嬉しい光線で雲霧をはらふ。旅人は段々暖かになる。お日様がますます照りつけると、堪らず熱くなつて、路傍に腰を卸し、上衣を脱ぎ捨てる。

太陽の結婚

むかし素敵に熱い夏があつたが、其時お日様が婚礼をなさると云ふ評判が立つた。あらゆる鳥獸は之を耳にして喜んだが、あるが中にも此奴ア一日飲めるわいと勇んだのが蛙連。処が一匹の老蟾蜍、そいつア止めた方が可からうぜ、屹度不目出度事になるからと云ふ。蛙一同する寄つて、何故、何故と宣しく訊くと、『わからねえか、お日様お一人でせえ斯う沼の水が烘上るんぢやねえか、お小供衆の五六人も出来たら己等は如何しやうツてえんだ。』

二つの壺

土で出来た壺と青銅で出来た壺と洪水の川を流れて来る。青銅で出来た壺が土で出来た壺に云ふ事にや『もツと傍へ寄んねえ、面倒見て遣るから。』土で出来た壺の答へる事にや『有難えにや有難えが、其奴アちと危ねえ。離れてどんぶりこ／＼やツてる分にや心配は無えが、衝突した日にや破れるのは己ばかりだからの。』

老人と死の神

老人が大きな薪の束を背負つて長い路を歩いた。もう草臥れて草臥れてへトへトになつて了ツたので、薪を投げ出して

ひ、あゝもう斯んなに苦しいんなら死んだ方が増しだと云ふので、死の神を呼ぶ。死の神は見る間に頭れて、用は何だと云ふ。すると老人『どうか最う一遍この荷を背負はしてお呉んなせえ。』

二つの袋

大昔の伝説によると、人と云ふ奴は袋を二つ首に垂下げて生れて来るものぢや。前の方の小さい袋には知人の過失が一杯這入つて居る、後の方の大きな袋には自分の過失が一杯這入つて居る。それだから人間と云ふ奴は他人の過失を見るのは誠に早い、だが自分の過失には得て盲なものぢや。

第一巻第三号（明治三十八年七月）

伊曾保物語

とろや山人

喇叭手

勇ましく軍隊の先に立つて行つた喇叭手が敵の捕虜になつた。喇叭手は泣き声を出して、『どうか命だけは助けて下さい。私は誰も殺しは致しません。ソレ御覧下さい、この真鍮の喇叭一つほか、刃物一つ持つて居ないのです。』と云ふ。『そ、それだから汝の命を申し受けやうと云ふのだ。汝が自分で戦はなくても、喇叭を吹いて皆に戦をさせるではないか。』敵は斯う云つたとサ。

雲雀

大昔の伝説に拠ると雲雀と云ふ鳥は地球よりも前に創造られたものだ云ふ。ある時雲雀の阿父さんが病氣で死んだ、雲雀の子はこれを埋めやうと思つたがソレ地面と云ふもの

が一坪もないから埋める事が出来ぬ。已む事を得ず五日間埋めずに置いたが、到頭六日目に、当惑の極、自分の頭の中へ是を埋めた。それから雲雀に鳥冠が出来たのだ、俗に之を雲雀の「父の土饅頭」と云ふ。

猫と恋の女神

一足の猫が或眉目秀麗な青年を恋ひ慕ひ、就ては人間の女の姿になりたいと恋の女神に祈願をこめた。恋の女神は其願を聞き納れられて直ちに猫を美しい姫御寮に変じた。青年は其姿を見ると、忽ちこれに想を懸け、聽ては宿の花嫁とした。ある日、二人が室の中に凭れ合つてると、恋の女神、猫め、姿と共に習慣まで変へたか不知？ 見て遣れと鼠を一足室の真中へおツ離した。猫は我を忘れて臥榻から飛び下り、室中鼠を追廻す。恋の女神は大に失望されて再び猫を元の姿に復したと云ふ。

游泳少年

川で泳いで居た少年が溺死を遣りさうにした、処へ旅の人が通り掛る、少年は声を挙げて救助舟を呼ぶと、其男は立ち留つたが手を出さうとせせず、いとも冷淡に其不注意を叱つた、すると少年が「貴父さん、助けてから叱つてお呉れヨ。」

盗賊と旅宿の主人

盗賊が旅宿の一室に陣取つた、滞在中に何か目ぼしい物を搔ツ浚つて、それで支払を済ます心得。五六日これと云ふものも見つからず稍鬱いで居ると、偶と旅舎の主人が新調の上衣を一着に及んで戸口に居るのが目に這入る、盗賊先生その隣りに座を構へて四方山の話をする、会話の気が少し抜けて来ると、盗賊先生恐ろしい欠伸をする、と一緒に狼の様な声で

吠える。旅舎の主人が不思議がつて「何故そんなにお吠えなさる？」と訊くと、盗賊先生「サ話せとあれば其訳も話さうがネ、先づ其前に、御主人、私の衣服を確然押へて居て下さらんか、せめて貴君の手に残したいからの。一体何時この欠伸の癖がついたのやら、又この吠えるのは何かの天罰なのやら其辺は一向に不案内だが、兎に角ぢや、私が三度吠えろと實際、狼になつて人を喰ひますヨ。」と云つて第二回の欠伸をする、次で狼の様に吠える。旅舎の主人は此話を真実と思つて、驚いて立ち上つて逃げうとする。盗賊先生其上衣の袖を掴んで「ど、どうか、御主人、私の衣服を押へて居て下さい。私狼に変わると衣服をスタスタに裂いて了ふのでな。」と云ふかと思ふと第三回の欠伸をする、狼の様に吠える。旅舎の主人、噛みつかれては大変と、掴まれた新調の上衣を脱ぎ捨て、一散に家中へ馳け込む。盗賊先生上衣を掴んだ儘其処を飛び出して再び旅宿へ戻つて来なかつた。

兄と妹

ある阿父さんが男の子と女の子を有つて居つた、兄は稀らしい美少年、妹はまた類のない不姿色。一日二人は仲好く遊んで居たが、偶と阿母さんの椅子の上に立て掛けてあつた鏡を二人一緒に覗き込んだ。兄は自分の美しいのを知つて大に喜び、妹は兄の自惚を自分の不姿色の非難と聞きなして怒る事か怒るまい事か、阿父さんの処へ飛んで行つて、兄様は男の癖に女の道具を使つてよと口を歪めて報告に及ぶ。スルト阿父さんは両手に二人を抱いて、さて云ふには「いいから二人とも毎日鏡を御覧そして兄さんは汚い行為をして其姿色を穢さぬやうにするのぢや、それから嬢は美しい

行為をして姿色の足らぬのを補ふのぶやう、よいか。』

仇同士

俱不戴天の仇同士、恰も同じ舟に乗り合した。出来るだけ離れて居やうと云ふので、一人は船尾に座る、一人は船首に座る。やがて恐ろしい疾風になつて舟將に沈まんとする。と船尾の方の人、船頭に声をかけて、船尾か船首か何方が先づ沈むと尋ねる。『船首でがせうヨ。』と云ふ答を聞くと其人『仇が己より先に死ぬのを見さへすりやア、己の死ぬのは何とも思はねえ。』

寡婦と牝鶏

ある寡婦が毎朝一つ卵を産む牝鶏を有つて居た。『大麥を倍食べさしたら、一日に二度生むだらう。』と云ふ考を起して、さて実行に及んで見ると、牝鶏は艶やかに肥つて来たが、卵は全然産まなくなつた。

半人半羊神

ある男が半人半羊神と懇意になつて一緒に食事をした。冬の恐ろしい寒い日だつたので、男は指を口の処へ持つて行つてフー／＼吹いた。『そりやア何の爲めです。』と半人半羊神が訊くと、『そりやアその、手が冷たいから暖めるのです。』と答へる。やがて何か一品湯気のポツポツ立つやうなのが食卓に登ると、男は皿を口の辺へ持ちあげて、又フー／＼吹く。『そりやア如何云ふ訳ですな。』と又半人半羊神が質問すると、『お汁が熱いから冷すのです。』と答へる。すると半人半羊神『只今限り御交際は御断り申し上げます。一つ口で冷したり暖めたりなさる方と御交際は出来ません。』

蟹

親の蟹が小児の蟹に云ふ事にや『何だツて、そんな横ツちよに歩くんだ！ 真ツ直ぐにお歩き！』すると小児の蟹『阿母ちゃん、歩いて見せてお呉んな、阿母ちゃん真直に歩けりやア私だツて後から歩いて見らア。』

犬に噛まれた人

犬に食ひつかれた人、誰か愈して呉れる人は無いかしらと探して歩く。と途で逢つた人の云ふには『麴包を傷の血に浸して、御前さんに食ひついた犬にお与りなさい、キツと愈りますよ。』すると食ひつかれた人は笑つて『ですが、御説に従ふと、必然此町中の犬に食ひつかれませうよ。』

第一巻第五号（明治三十八年八月）

伊曾保物語

とろや山人

お月様

お月様が阿母さんに外套を強請ると、お月様の阿母さんの云ふ事が面白い。『御前の様に三日月になツたり満月になツたりする人に、似合ふやうな外套はありませんよ。』

老婆とお医者様

盲になツた老婆、お医者様を招いて約定を結んだ、若し見える様になツたら立派な御礼をしやう、然し若し愈らなかつたら何も与らないと。条約成るとお医者様、時々来ては老婆の眼をチヨイと弄つて帰る、其度に必然一つ道具をチヨロまかして行く。好い加減チヨロまかした時分に、始めて熱心に療治を仕出して、轡て愈した、扱お約束のと云ふ事に成る。処が老婆、眼は見えるやうになツたが、家の道具が更に見

えない。お医者様に求まれて、辨疏の百万遍を繰り返した揚句、到頭裁判所へ呼び出される事になる。裁判官が被告の答辨はと云ふと老婆躍り出て、『ハイ、ハイ、此先生様の仰る事は悉皆真実の事で、ハイ、ハイ、見えるやうになつたら御礼をしやう、愈らななら何も呈げぬと、ハイお約束も致しまして、ハイ、ハイ。処が今先生様私の目愈つたと仰るで、ハイ升が、私はイヤ愈らねえと申すで、ハイ、ハイ。何故と云つて、私が此病にかかる迄は、家の道具悉皆見えたで、ハイ升が、ハイ、今先生様私の眼愈つたと仰つても家の道具何にも見えねえで、ハイ、ハイ。』

捕鳥者と天鵲

捕鳥者が共有地に係蹄を仕掛けてるのを見て、天鵲が遠くから声を掛けた、『貴君は其処で何をして在つしやるのです。』すると『私か、私は今度此地に殖民地を興すので、今町の基礎を区切つて居るのだ。』と云つて捕鳥者其処を去つて、暫時小蔭に身を隠す。天鵲は捕鳥者の言を信じて其処へ舞ひ降り、一口餌を食ると、忽ち輪索にかゝつて了つた。捕鳥者は即刻に姿を顕はして獲物を手に入れる、其時天鵲の云ふ事にや『この殖民地にやア余り移住者がありませんまいぜ。』

病める鳶

永々病つて居る鳶、阿母さんに云ふ事にや『泣きなさんな、阿母、それよか神様に「何卒此大病の癒りますやうに」ツて拜んでも呉れたが好いぢやアねえか。』すると阿母さん『だつて御前、神様の御供、物ばかり盗んで居た御前ぢやないか、其様な御願の出来た義理は何処にあるよ。』

老婆と下婢

勤勉な老寡婦に仕へて居た下女二人、毎朝鶏の八声と共に叩き覚される。これが嫌さに二人の下女共謀して鶏の首を絞め、これさへ居なくなればと安心の枕を高くして居ると、老婆の方は目覚しが失つたので、寐過ごしてはならぬ、寐過ごしてはならぬと思ひ寐の夢安からず、はては時間を間違へて、夜半に二人を叩き起す事連夜。

驢馬

祭礼の行列で驢馬が偶像を背にして通る、路傍の市人は是を見て跪座礼拝する、驢馬先生、自分を拝むのだと思つて、反り身になり、はや一足も進まうとせぬ。御者は忽ち色をなして、発矢と一鞭、驢馬の背に呉れ、『馬鹿ア！ 拝んでるのは手前ぢや無え、手前の背中の神様だわ。』

海辺の旅人

海沿ひの旅路行く同行二三人、只ある懸崖へ差し掛ると、海原遠く薪のやうな物の流れて来るのが見える。何でも是は大船に達しない、港入りを見やうではないかと一同待つてると、段々近くなる、近くなるのを見ると、大船では無い、確かに小舟だ。さて愈海岸に打揚げられたのを見ると矢つ張、薪。

驢馬の影

一人の青年、夏の真盛りに驢馬を雇つて、アゼンスからメガラへと志した。お午頃になると焦りつくやうな暑さなので、青年は乗り堪らず、驢馬から降りて驢馬の影で一休憩休まうとすると、御者は青年を押退けて其処へ這入らうとする、そこで『何だい！ 此驢馬は私がメガラへ着く迄雇つたものではないか。』と遣付けると『そりや左様です、成程驢馬はお雇ひになりました、だが驢馬の影はお雇ひになりませんまい。』などと理屈

を云ひ出して、擦つた揉んだの真最中、驢馬は逸足、影も形も。

マアキュリイ
商神

マアキュリイ、人界に於ける自分の価値を知りたいと思つて、旅人と身を扮し、彫刻師の店に這入り込んで、彼是と像の価値を訊き始めた。先づジユピタアの像を指して、彼は何程と訊く。彫刻師『一ドラクマ。』と答へる。マアキュリイは袖の中に笑を隠して、然らば是はと、ジユノオを指す。彫刻師、ジユピタアよりは高価を云ふ。纏てマアキュリイ、自分の像に眼をつけて、心竊かに思へらく『此奴、必然己の像を十倍も高く云ふぞ、何しろ己は天の使で商売繁昌の守本尊だからな。』さて愈マアキュリイの価値を訊くと、彫刻師『左様、ジユピタアとジユノオを私の云ひ価で買つて下さるなら、其マアキュリイはおまけにしときませうよ。』

(伊曾保物語一先づ終り)

注

- 一 『東京日日新聞 4』(日本図書センター、一九九四年二月)の復刻版に拠る。
- 二 『以良都女』(不二出版、一九八三年一月)の復刻版に拠る。
- 三 『昭和天皇実録 第一』(東京書籍、二〇一五年三月)
- 四 注三文献に同じ。
- 五 巖谷小波『イソップお伽噺』(三立社、一九一一年八月)

六 吉見孝夫「幕末、明治初期の新聞に掲載されたイソップ寓話―『万国新聞(紙)』『中外新聞』『遠近新聞』

―』(『イソップ資料』第三号、二〇一三年三月)

吉見孝夫『絵入朝野新聞』に連載された『伊曾保物語』―解説編・複写編・翻字編―』(『イソップ資料』

第四号、二〇一四年三月)

吉見孝夫『遠近新聞』に掲載されたイソップ寓話―

花間隆氏の指摘による補訂―』(『イソップ資料』第

九号、二〇一七年四月)

七 吉見孝夫『ROMAJI ZASSHI』に掲載されたイソップ

寓話』(『イソップ資料』第二号、二〇一二年三月)